

## 明治 14 年明治天皇庄内巡幸

奥 村 淳

明治 14 年（1881）7 月 30 日、明治天皇は奥羽・北海道巡幸に出発した。天皇は満 30 歳にならない青年天皇である。明治天皇の行幸は明治元年（1868）の大阪行幸から明治 45 年（1912）の千葉県行幸まで 99 回とされ、歴代天皇と比較するならば「その回数と距離は圧倒的であった。」<sup>1</sup>なかでも明治 5 年の西国巡幸、明治 9 年の奥羽巡幸、明治 11 年の北陸・東海巡幸、明治 13 年の山梨・三重・京都巡幸、明治 14 年の奥羽・北海道巡幸そして明治 18 年の山陽道巡幸が六大巡幸とされる。

多くの巡幸、なかでも六大巡幸の意図については次のような説が一般的である。まだ全国的な支持を得ていたわけではなかった明治政府が「一般民衆の人心を掌握することによって、一日も早く全国的支配権を確立することが必要であった。明治政府は天皇が神の後裔であり、古来から変らぬ最高の指導者であることを広く一般民衆に認識させようと努力し、それによって新政権の正当性を保障し、権威づけるとともに、天皇を民族的統一と国家的統合の機軸としようとしたのである。しかも、これらの六大巡幸は明治十年代、それも自由民権運動期に集中している。それは、この時期ほど明治国家にとって『人心ノ収攬ノ必要性』がさし迫っていた時期はなかったからであり、それはまさしく近代天皇制国家の国づくりの時期にあたっていたのである。明治政府は天皇巡幸を通して天皇崇拝を民衆に広め、全国に新しくおこってきた対立勢力『民権派』に対抗し、自由民権運動を克服して天皇制国家を確立しようとしたのである。』<sup>2</sup>これに対して「巡幸に対する研究は、政府の自由民権運動への対抗策と、天皇の神格化という視点から論じられてきた。しかしその内容は実証性に乏しく、正面から巡幸を論じていない。つまりこれまでの研究は、巡幸を通してその時代を考察するというよりは、後世からの視点を正当化する一つの道具として巡幸を利用していた感を拭えない。」<sup>3</sup>という新しい説がある。この説によれば東北巡幸は次のような意味を持つ。「明治国家創生期における東北巡幸は山形巡幸が物語るように、政府にとって国家的制度・政策を各地域へ浸透させる場としてあるのみならず、地域産業の視察と奨励をとおり、地方の富を国益にしようとする姿勢から推進された。富国強兵を早急に達成しなければならない政府が、直接的に手の及ばないところへ、カンフル剤

1 「正論」平成 14 年 12 月臨時増刊号（「明治天皇とその時代」）p.180

2 「山形県史」第 4 巻、山形県（編さん兼発行者）、昭和 59、p.201 以下

3 宮崎康：東北振興策としての山形県巡幸（大濱徹也編「国民国家の構図」雄山閣、平成 11、p.75）

的役割として期待したものである。」<sup>4</sup>また「明治新政府の中枢において、東北は未開にもかかわらず、いや未開だからこそ、開拓の最優先地であるという判断もありました。」<sup>5</sup>も同じ立場といえよう。たしかに東北地方の巡幸でも殖産勸業の一環として荒蕪地の開墾模様や牧畜場の視察がなされ、製糸工場や鉱山などの視察もなされた。各地で功労者の褒賞がなされ、多額の資金が下賜されたりしている。しかしそれ以上に目立つのは田植えや草取り、米などの収穫といった農作業と河川湖沼における漁獲の天覧である。「地域産業」ならぬ古来の産業が各地で天覧に供された理由は存在するのか。それは「天皇制国家」の「確立」といかなる関係にあったのか。このふたつについて、山形県の庄内地方における巡幸を中心にして考察したい。

1

山形県庄内巡幸は明治 14 年（1881）9 月になされた。奥羽・北海道巡幸の一環である。奥羽・北海道巡幸に供奉した者や行幸全体の経路等は以下になる。供奉者は左大臣有栖川宮熾仁親王、陸軍歩兵中佐北白川宮能久親王、参議大隈重信、参議開拓長官黒田清隆、参議大木喬任、内務卿松方正義、宮内卿徳大寺実則、宮内大輔杉孫七郎、宮内大書記官堤正誼、侍従長米田虎雄、同山口正定などである。そのほか侍従・侍医、騎兵・夫卒・馬丁等併せて「約三百五十人、初め約四百二十人を算せしが、巡幸地宿驛概ね狹隘にして、宿泊に充つべき民家僅少なるを以て、其の六分の一を減せしめたまへり」（「明治天皇紀」第五，p.417；<sup>6</sup>）「減」とはいえ、約 350 人という大人数だった。これにさらに大勢の現地の人数が加わった。山形県では 1 千名近い人数になったのである。巡幸の一行は明治 14 年 7 月 30 日赤坂の仮皇居を出発し、千住を経て草加に宿泊した。以下宿泊地だけをあげると、幸手、小山、宇都宮、佐久山、芦野、須賀川、二本松、福島、白石、岩沼、仙台。仙台到着は 8 月 12 日である。仙台から古川、築館、磐井、水沢、花巻、盛岡、沼宮内、一戸、三戸、八戸、三本木、野辺地、青森。青森到着は 8 月 27 日である。ここまでの道筋は明治 9 年の奥羽巡幸とおおむね重なっている。青森からは御召艦扶桑で小樽に渡り、札幌の行在所へ。札幌から千歳、白老、室蘭。室蘭から御召艦迅鯨で森。森から馬車で函館へ。函館から青森に戻ったのが 9 月 7 日である。9 月 9 日に青森を出発し、弘前、蔵館、大館、二ツ井、能代、一日市、土崎港、秋田、境、角間川、湯沢をへて下院内。下院内到着は 9 月 21 日である。9 月 22 日に下院内から秋田・山形県境の杉峠を越えて山形県に入り、及位、金山を経て新庄に着いた。山形県における最初の行在所は最上郡役所におかれた。翌 9 月 23 日新庄から庄内に向かった。本合海から最上川沿いに進んで庄内の入り口東田川郡清川村の行在所（東田川郡中学校兼清川小学校）に着いた。そこから 9 月 24 日鶴岡（行在所は西田川郡役所）、9 月 25 日酒田（行在所は渡邊作左衛門の家）に進んだ。9 月 26 日清川（行在所は 9

4 宮崎，前掲書，p.76

5 河西英通「東北一つくられた異郷」（中公新書）2001，p.19

6 宮内庁「明治天皇紀」第五，吉川弘文館，昭和 46，p.417（以下においては巻号とページを本文において示す。）

月 23 日に同じ)に戻って庄内巡幸は終わった。一行は清川から新庄に戻り、楯岡、山形、高畠、米沢と進んだ。米沢到着は 10 月 2 日である。翌 10 月 3 日米沢の行在所(南置賜郡役所)を発って福島に向かい、本宮、郡山、白河、佐久山、宇都宮、小山。小山から今回の巡幸最後の宿泊地幸手に着いたのは 10 月 10 日だった。翌日の 10 月 11 日赤坂の仮皇居に還幸して、74 日に及ぶ巡幸は終わった。北陸・東海巡幸の 72 日を上回る最長の巡幸である。山形県には 11 日間駐蹕したことになり、この巡幸では最も多い日数であった。この 11 日間のうち庄内地方には 4 日間も駐蹕がなされている。ひとつの地方に 4 日間も行在所がおかれたのは異例である。それは単に地理的なものが理由ではなかったはずである。同じ山形県でも内陸の山形を中心とする村山地方には 3 日間であり、米沢を中心とする置賜地方は 2 日間でしかなかったからである。

天皇という存在は元來行動をひどく制約されていた。寛永 9 年(1632)以後に限ってみるならば、御所の火災などを別として、御所から外に出ることを幕府によって禁止されていて、「近世歴代の天皇は幽閉された国事犯のようなものだった、と言っても誇張にはならない。」<sup>7</sup>という。明治天皇の先帝である孝明天皇については「石清水参り以外御所の外には一步も出たことがない。」<sup>8</sup>という説さえある。先帝たちと対照的である明治天皇は巡幸先、わけでも庄内においてどのように受け入れられたであろうか。

明治 14 年 9 月 23 日明治天皇は新庄を発って、本合海から最上川沿いに進んで夕方清川に到着した。庄内巡幸の始まりである。「明治天皇紀」は以下のように伝えている。少し長くなるが、庄内に入るまでの模様をよく伝えているのでそのまま引用したい。

「二十三日…新庄發輦、本合海町村に到りて肩輿に御し、最上川の船橋を渡りて馬車に復御し、古口町村御晝餐所に到らせらる、午後一時二十分肩輿に御して發し、上臺坂・佐渡堀坂を踰えたまふ、更に一坂あり、下りて隧道二十間を過ぐれば最上川の奔流峡谷を下る、少時蹕を河童淵坂上に駐めたまふ、舊時、本合海町・清川兩村の交通は舟楫に依るの外なかりしが、明治十年縣令三島通庸其の不便を慨きて新道開鑿の工を起し、翌年其の功を竣ふ、即ち本日の輦道にして其の里程五里二十町、通庸、侍從長山口正定によりて開鑿工事の困難なりし概要を奏し、又前岸に數戸の茅舎あるを指さして、樵夫生を山中に營むの狀を天聽に達す、瀑あり、一を頭光、二を駒爪、三を大瀧と曰ひ、前岸の絶壁より落つ、仙人向坂を登れば水を隔てて權現堂あり、傳へて曰く、源義經潜行の際常陸坊海存行を修して登仙せる處なりと、通庸曰く、登仙のこと信ずべからずと雖も、當時、僧辨慶が月山を下りて是の地に來り義經に邂逅せることは、舊記に其の證ありて疑ふべからずと、正定其の趣を奏す、既にして草薙村に到りたまふ、峽中第一の絶勝にして、對岸の峭壁天を摩し水簾直下す、白絲瀧と曰ふ、高さ五十丈、幅六間、少時蹕を駐められしが、偶々山風微雨を吹きて到る、乃ち發したまひ、立谷澤川の清流に沙金を採れる狀を東雲橋上より天覽、五時十分清川村に著御、行在所東田川郡中學校兼清川小學校に入りたま

7 ドナルド・キーン(角地幸男訳)「明治天皇」上巻、新潮社、2001、26

8 「司馬遼太郎對話選集」4(近代の相克)(文春文庫) p.115

ふ、村民網を最上川に投じて鯉魚の大なるもの數十尾を獲て獻る、賜ふに其の價を以てす」(「明治天皇紀」第五, p.504 以下)

三島通庸が開いたこの道路について通説では「あまりに難工事で岩の根を切り開くという意味から、山形県令が『盤根新道』と命名した。」<sup>9</sup>とされる。工事の困難さは明治 11 年 7 月 25 日に草薙の草薙神社境内に立てられた盤根新道碑の碑文からもよく知られる。盤根新道は現在の国道 47 号の原型であり、国道 47 号は山形県の庄内地方と内陸地方を結ぶ幹線道路である。現代においても開鑿当時の難工事ぶりをしのぶことは難しくはない。しかし当時の政治情勢を考慮するならば、むしろ盤根新道という名前そのものに政治的な意味がこめられていたと考えるべきではないか。盤根新道の工事は確かに岩の根を掘り起こすような困難な工事ではあったが、しかし明治初期の全国的な新道開鑿という視点で考えるならばこれは困難な新道開鑿のひとつだったからである。奥羽でいうならば、たとえば秋田県鷹巣と二つ井の間の加護山・後坂(きみまちざか)新道の開鑿がある。山形県・米沢と福島県をつなぐ刈安新道(のち万世大路)開鑿はことに難工事であった。刈安新道も山形県側では三島県令のもとでなされた。盤根新道は庄内に対する政府の意識を反映してつけられた名前なのである。明治 10 年 8 月 15 日参議伊藤博文は上奏文に「盤根錯節」なる新道と同じ言葉を使用して政情に対する危機感をあらわにした。西南戦争の最中のことだった。「難ヲ避ケ易ニ就クノ事無キコト能ハス而盤根錯節猶ホ斧斤ノ外ニ臥スル者アリ是レ蓋シ西南ノ變俄カニ起ル所以ニシテ其由テ來ル所ヲ求ムルニ深ク怪ムニ足ラサルナリ」(「明治天皇紀」第四, p.231)「斧斤ノ外」にあるのは岩や木の根だけではなかった。明治 7 年の佐賀の乱, 明治 9 年の神風連の乱, 秋月の乱, 萩の乱。「斧斤ノ外ニ伏スル者」は多かったのである。自由民権運動も高まるばかりだった。国内情勢は文字通り「盤根錯節」すなわち「困難な事柄」(「新版漢語林」)として意識されていたのである。盤根新道という名称にはこのような政治的な意味がこめられていたのである。西南戦争が始まった時、政府は戊辰戦争因縁の旧藩領域を警戒した。東北は特に警戒されたが、なかでも庄内に対する警戒の念は「明治天皇紀」に多く記述されている。たとえば明治 10 年 3 月 1 日の記述はこうである。「初め鶴岡舊庄内藩士族等, 明治戊辰の役畢るや鹿児島士族と懇親を結び, 殊に西郷隆盛帰郷の後はその存亡を與にせんと盟約せるものの如く, 世人多くは, 隆盛等にして事を擧げんか, 率先之に應ずるものは鶴岡なるべしと信じて疑はず」(「明治天皇紀」第四, p.105) 仙台鎮台から山形県内陸まで兵が派遣されたり, あるいは「鶴岡士族暴發す」(「明治天皇紀」第四, p.105)という誤報さえ流れた。西軍(新政府軍)と戦った東軍(奥羽越列藩同盟)のなかで最後まで抵抗したのが会津藩であり, 庄内藩である。戊辰戦争後庄内藩に対する措置は予期されたものよりはるかに寛大だった。庄内の人びとはそれを西郷の恩顧と受け止め, 前藩主酒井忠篤が家人 70 名とともに鹿児島に出かけて西郷に接したりした。

9 「山形県歴史の道調査報告書最上川(二)」山形県教育委員会, 昭和 54, p.21

三島通庸は薩摩藩士の家に生まれ、戊辰戦争にも従軍した。西郷隆盛や大久保利通にひき立てられ、鹿児島や東京で役人として有能ぶりを示す。明治 5 年には中央官庁の筆頭におかれた教部省の教部大丞に任命され、「国家神道樹立の基礎固めを行なう」<sup>10</sup>とされる。そして明治 7 年 12 月に酒田県（第二次）の県令に任命された。その際に大久保利通は三島に次のように語ったという。「東北の経綸については君が一臂を借りなければならない。見よ東北の地土壌の広潤なる。世人これを称して皇国の宝庫という。しかるに其地辺遇に避在し皇国の徳化を蒙ること甚だ薄く、いまもって深く開明の治下に沐浴せず、いわんや戊辰の役以来連りに兵火に懸り傷夷いまだに癒えず、これが土民たるも皇家のなんたるを辨せず…」<sup>11</sup>三島にかけられた政府の期待は大きかったのである。

「空間支配という新政府の施策全般にわたることになるが、最も顕著な例としては度重なる行幸などが思い浮かぶ。大阪を皮切りに実施される一連の地方巡幸を通じて天皇の可視化が進められた。行幸とはそもそも天皇の外出をさした言葉であり、天皇の行く先々で民衆は徳沢を蒙り幸いがもたらされると考えられてきた。」<sup>12</sup>三島通庸は「皇国の徳化」あるいは「徳沢」を庄内にもたらし尖兵として期待されたことがわかる。

山形県庄内地方は大部分が鶴岡・酒井藩（庄内藩）に属していた。天保年間の三方領知替え事件、すなわち庄内藩を減封して越後長岡に移すことを核とする幕府案は庄内全体に及ぶ反対運動の結果撤回された。今に伝えられる〈酒居大明神〉の旗とか、あるいは庄内に伝わる素朴な小豆菓子「狐面（おきつねはん）」はこの反対運動に由来する。狐は稲荷神の使いであり、イナリは〈居るまま〉を意味するからである。命令の撤回によって幕府の面目は失墜した。「百姓の保守性を思わせるこの一揆は、分際を超えた行動として見れば、民衆の大胆な政治化を表すものであった。」<sup>13</sup>と評価される。明治に入ると東北地方では一揆が増加したが、特に庄内地方では騒動が頻発した観がある。明治初年の庄内藩の転封問題は 70 万両という莫大な献金と引き換えで中止となった。深くかかわった本間家の本間光美は日記に「誠ニ恐悦至極」<sup>14</sup>と書いたという。また「藩士一同大喜び」<sup>15</sup>したという。献納金は士族だけでなく、農民も商人も負担した。その返納金問題も含め、明治 2 年には天狗騒動が起こった。役人の不正や雑税反対の運動である。それは県知事の罷免にまで至ったが、明治 5 年 1 月に農民 5 千人の大集会が力づくで解散させられたことで終息する。しかし明治 6 年末からはワッパ騒動が始まったのである。政府が明治 5 年 8 月に出した年貢の金納を認める石代納令が庄内では知らされないままにされていた。県は従来通り正米納を求めたのである。それは差額によって県と業者に多額の利潤を約束

10 岩本由輝「東北開発人物史—15 人の先駆者たち—」刀水書房、1998、p.29

11 丸山光太郎「土木県令・三島通庸」栃木県出版文化協会、昭和 54、p.51

12 笠原英彦「明治天皇」（中公新書）2006、p.109

13 深谷克己：移行期の農民運動（『地鳴り山鳴り—民衆のたたかい三〇〇年—』国立歴史民俗博物館、2000、p.7）

14 「鶴岡市史」中巻、昭和 52、p.114

15 「鶴岡市史」中巻、p.116



するものであった。真相を知った農民は差額の返却金（下戻金）は一人当たりワッパひとつになると期待した。運動の名前の由来である。ワッパとは弁当箱のことである。「明治七年八月から九月上旬にかけて、農民の雑税廃止・村役人不正追及の運動は最高潮に達した。」<sup>16</sup> 当時庄内は酒田県ひとつに統一されていたが、酒田県は運動の指導者の一人の名前をとって金井県と自称するまでになり、「酒田県が存在を揺るがすまでになった。」<sup>17</sup> 明治 7 年 9 月には農民 1 万 5 千名が逮捕者奪還を要求して酒田監獄を目指して進み、「酒田県は総力をあげて鎮圧」<sup>18</sup> に努めなければならなかった。この事態に対しては士族千名以上が臨時に警察として関与したのである。また太政大臣三条実美は明治 7 年 9 月 17 日付け文書で酒田県当局に対して、鎮静のためには相当の事をしてもよいとした。その文書は「藤島町史」によれば以下のようなものである。「其県下村々騒擾の趣相聞候に付ては、鎮静候様可取計は勿論に候得共、時機不得止節は、此度限り臨機処分被指許候条、此旨相通達候事。但首魁並に連累の者共、捕縛の上所断の儀は、伺出候儀と可相心得候事」<sup>19</sup> 当局による「臨機処分」可能というのである。引用文に続けて「相当の弾圧があったことが想像される。」<sup>20</sup> とする「藤島町史」は、ワッパ騒動をまとめて「(明治の革命)」と言い切っているほどである。三島通庸はかかる情勢下において酒田県令に任命されたのである。「由来、鶴岡藩は酒井家が代々善政を施してきたので一揆がないことを誇りにしていたが、明治維新後はこの騒動の以前からむしろ農民騒動の多発地帯となり、ワッパ騒動は、とくにのちの自由民権運動につながるものという意義を有したのである。」<sup>21</sup> 「このワッパ事件は、明治政府発足後日なお浅いために連鎖反応を起こし易く政府も重視」<sup>22</sup> する必要に迫られたのである。

三島は任地に「皇国の徳化」をもたらすべく期待された。明治 9 年三条実美が大久保利通、伊藤博文とともに庄内を視察した。翌年に計画されていた巡幸の調査である。その結果内陸と庄内の間には天皇の馬車が通ることができる道路が存在しないことが判明し、庄内の巡幸は中止された。「其の里程五里廿町、…舊時には輕舟を倩ひて流を下るの外、往來の道なかりしは、明治九年三条実美、朝命を奉じて東北地方を巡察し、この地に抵りし際にも、小舟を艤して奔湍を下れり。県令三島通庸深くその不便を慨き、新道開鑿の策を決し」<sup>23</sup> というのが盤根新道開鑿の事情である。「皇国の徳化」はまず交通網の整備によってもたらされるものであった。盤根新道という名前はただ工事の困難さに由来するだけではなかったのである。

16 佐藤誠朗「ワッパ騒動と自由民権」校倉書房、1981、p.12

17 「余目町史」下巻、余目町、平成 2、p.52

18 「山形県史」第 4 巻、p.71

19 「藤島町史」下巻、藤島町役場、昭和 47、p.24

20 「藤島町史」下巻、p.25

21 岩本、前掲書、p.29 以下

22 「藤島町史」下巻、p.23

23 「山形縣行幸記」山形縣教育会、大正 5、p.113（「序」は大隈重信である）

「中国史上最初の皇帝となった秦始皇帝に残されていたのは旅また旅の人生であった。…みずからの支配領域を『経巡る王』。目を始皇帝以前に転ずるとき、われわれはそこに日々の田獵をトわれていた殷王、あるいは繰り返しその支配地を経巡っていた周王の姿を認めることができる。また儒教の經典においても、帝王はその支配領域を巡狩すべきことが規定されている。」<sup>24</sup> それには道路というものが不可欠だった。「そもそも自らの支配する地域を王が巡視してまわることは、殷王について確認されている。これは甲骨文を用いて得られた結論で、殷王は、日常的には自らが居住する都市に直接付随する都市や村を巡視していた。それは一日で行き帰り可能な範囲に限られていた。そして必要に応じて遠征し、その際も巡視して祭祀を挙行した。戦国時代に領域国家ができあがっても、巡視の範囲は似たりよったりだった。自らが支配する国家領域を巡視し、日常的には首都に居住する。特別地域の民は、王の徳に感化される。官僚たちがその徳治を支える。野蛮の地、つまり天下から特別地域を除いた残りの地域も、王の徳に感化される。そのことを明確に文章化すると、感化された結果として天下の交通網が利用され、物資が特別地域に運ばれる（貢納される）ことを記すことになる。」<sup>25</sup> 庄内地方という「野蛮の地」に対して「王の徳」、「皇国の徳化」をもたらすという政治的な目的のために盤根新道の開鑿は決定された。「野蛮の地」に「王の徳」をもたらすことはまさに「盤根錯節」の事業だったのである。

三島通庸は鬼県令と呼ばれた。山形県や福島県における道路工事のための強制的な献金も含めた強権政治が〈鬼県令〉という別名の由来である。酒田県では太政大臣のお墨付きであるが、山形県の後に任地となった福島県では県令として激しく自由民権運動を弾圧した。使命感のなせる強権政治にかかわる世評は天皇の耳にも達していたことがうかがわれる。明治 11 年北陸・東海巡幸の途中、一行に加わっていた侍補佐佐木高正と侍従四辻公業等が別行動をとった。9 月 19 日新潟から山形県視察に向かったのである。山形県の三島県令が先導した。三島県令には山形県への巡幸請願という課題があった。山形県の視察を終えた佐佐木侍補は 10 月 6 日小松で一行に追いつくと、夜 8 時 30 分ただちに天皇へ報告を行った。「世上喧傳する山形縣令三島通庸に係る批難は、畢竟管内道路開鑿等の工事を急激に行はんとするに因るものなり、然れども縣民中、其の施政を歡べる者亦少なからざる趣等を奉聞す」（『明治天皇紀』第四，p.525）佐佐木は翌日福井の行在所（東本願寺別院）でも報告を重ねている。山形県は懸念の対象だったのである。

## 2

六大巡幸では行く先々において農作業や漁獲の様子が天覧に供されている。それは製糸工場などの近代産業の天覧と著しい対照をなしている。旧士族中心の荒蕪地等の開拓もよく天覧に

24 「古代王権の誕生 I 東アジア編」角川書店、平成 15，p.241

25 平勢隆郎「都市国家から中華へ 殷周春秋戦国」（中国の歴史 2）講談社、2005，p.185

供されているが、本稿では昔ながらの農業と漁業についてそれらが巡幸においてどのような意味を有していたかということを考察する。それらの天覧がもっとも多く、それは天皇の本質と密接に関わっていたように思われるからである。

魚獲の天覧について椿事が発生したことがあった。北陸・東海巡幸における出来事である。明治11年9月16日行幸は弥彦の行在所（五十嵐盛厚の家）を発して新潟に向かった。弥彦神社に参拝し、赤塚村を経て内野村に至ったところ、村の新川の三日月橋上で魚網の模様が天覧に供された。「漁夫數十人小舟に分乗して魚を網するを覽たまふ、忽ちにして鯉魚數十尾を獲たり」（「明治天皇紀」第四，p.492）椿事が発生したのは新潟の行在所（新発田の白勢成熙の別宅）においてである。「是の日新川にて獲る所の鯉魚を天覧に供す、侍補佐佐木高行、其の顎に線縷を結べる痕跡あるを發見し、訝りて之を言上す、豫め絲を以て河底に繋ぎ置けるならんとて笑はせたまふ、後新潟縣官に慰勞の酒饌を賜ふの時、天皇縣令に對して宣はく、縣下産する所の鯉魚は甚だ奇異なり、其の顎を見るに悉く線縷の形象ありと、縣令恐懼して奉答する所を知らざりしが、捕獲の少からんことを憂ひて、鯉魚を河流に繋留せる旨をあからさまに奏上し、之を陳謝せるに笑はせたまふ、鯉魚は其の價を漁夫に給し、而して之を食膳に供進せしめたまひ、又供奉の奉任官以上に頒ち賜ふ」（「明治天皇紀」第四，p.492 以下）役人がすることは時代を超えているといえ簡単であるが、「捕獲」は大漁でなければならなかった。

庄内巡幸では清川で砂金採取の模様と鯉漁の様子が天覧に供された。草薙の御野立所あたりで降り出した雨と風がなお止まない状態だったが、「郡長以下郡内吏員、縣會議員、小学校児童みな郡界に出て奉迎し、士女参拝するもの路に充てり。…村民網を最上川に投じ、鯉魚の大なるもの二十六尾を獲て之を行在に獻ぜり。」<sup>26</sup> とは「山形縣行幸記」の記述である。砂金採取がなされた立谷沢川は古来砂金を産出した。砂金採取とは六大巡幸でも稀な天覧である。もっとも実際に砂金採取がなされていたのはずっと上流の集落である瀬場付近だったから、これは採取の方法を見せたということであろう。竣工まもない長さ百間の東雲橋上からの天覧である。立谷沢川の砂金は宮内省御買上品のひとつになったが、砂金採取の天覧と砂金の買い上げはおそらくその土地の支配権を象徴する行為として意識されたと考えられる。立谷沢川が最上川と合流するすぐ下流が清川である。行在所がおかれた清川小学校は村の入り口、東端に位置していた。清川で天皇は鯉魚を天覧した。「明治天皇紀」には「村民網を最上川に投じて鯉魚の大なるもの數十尾を獲て獻る、賜ふに其の価を以つてす」とあるだけだが、捕獲された大鯉は26尾だったわけである。捕魚は9月24日清川から鶴岡に向う途中も天覧に供された。「午前時々降雨あり、冷寒なり、清川村を發し、狩川村・藤島村を過ぎ赤川の清流を渡りたまふ、魚を網して天覧に供するあり、午前十一時鶴岡に著御、行在所西田川郡役所に入りたまふ。迎拜の民、街衢に充溢す」（「明治天皇紀」第五，p.506）網漁は赤川にかかる三河橋からの天覧であった。9月

26 「山形縣行幸記」p.114 以下



25 日鶴岡から酒田に向かった際も最上川で魚を捕るところが天覧に供された。最上川左岸の新堀村の小休所（加藤勘左衛門の家）を出て中州の小牧村御召換所から右岸の南五丁野御野立所に入った。「既にして新堀を過ぎ、樓船に御して最上川を渡りたまふ、幅三町二十間、雨餘河水漲りて棹さすべからず、乃ち大索を張り、水手數人御船に在りて索を引き、以て流を横斷す、南五丁野御野立所に入りたまふ、鮑海郡有志魚を網して天覧に供し、獲る所のものを獻る」（「明治天皇紀」第五、p.508）

最上川中洲の小牧村御召換所から右岸の南五丁野の小休所への移動がおおごとだったことは「明治天皇紀」からも知られるが、「山形縣行幸記」の描写はいっそう緊張感をはらんだものになっている。「押切新田村より二里六町、新堀村に抵りたまひて加藤勘左衛門が家に御小休あり。午後四時、最上川の中洲なる小牧村御召換所に着きたまふ。最上川この處に至りて其の幅三丁二十間、架橋の設なし。依て豫め船貳拾九艘を備へ、一艘を御坐船とし、三艘は御車を渡すに用ひ、五艘は近衛騎兵の馬を載せ、拾艘には供奉諸員を載せ、他の拾艘は御荷物を積むに備ふ。時に霖雨の餘、河水平方に漲りて流勢箭の如く棹を用ふべからず、絙を両處に張る、一は御舟を渡すところ、他の一は縣吏等往復のところとす、舟子數人、船首に在りて絙を繰り以て流を横切る、飛沫舷に迸りて崩雪の如し。主上、御板輿に御して御召換所を出させたまひ、河を渡りて前岸なる字南五丁野の御小休所に着きたまふ時に午後五時三十分なり。鮑海郡の民、大引網をなして 天覧に供す。大宮村の東河原に於て絶えず煙火をうち揚げ、郡長、郡吏、町村戸長、用掛等及学校生徒數千人校旗を翻へし、道路の側に奉迎せり。御小休所より復た馬車に召し、午後六時二十分、酒田港行在所に着きたまふ。」<sup>27</sup>「鮑海郡有志者」<sup>28</sup> に対しては 150 円の恩賜があった。「御野立場及御召換所を建設し且つ漁魚等献上したるを以て」という理由である。御野立場と御召換所とは小牧の御召換所と南五丁野の小休所を指すと考えられる。呼称の不統一は珍しいことではない。いずれにしろ網には魚がかかったのである。

その頃最上川の流勢は強かったようである。行幸の一行のなかで一等編修官川田剛と宮内省御用掛兒玉源之丞は本合海から清川へ舟で先行した。ところが船頭が目的地を清川ではなく、酒田と誤解してしまい、清川に舟を停めなかった。二人は清川を通過してからそれに気がついてあわてたが、しかし最上川は「奔流にして棹を返すべからず」（「明治天皇紀」第五、p.508）という状態だった。ふたりは酒田で待つよりなかった。これによってふたりが先行した 9 月 23 日にすでに最上川の水流量が強かったことがわかる。行幸が酒田を発した 9 月 26 日は「水勢昨日より減ず、渡航して新堀を過ぎ」（「明治天皇紀」第五、p.510）とあるから、前日まで最上川の流れは強かったのである。清川の鯉の網漁についても同様であるが、南五丁野では漁業作業にはまことに不適當な条件だったと考えられる。にもかかわらず大漁となった。また 9 月末とい

<sup>27</sup> 「山形縣行幸記」p.124 以下

<sup>28</sup> 「山形縣行幸記」p.132

う日付の日没時間も考慮する必要がある。夕闇が漂い始めたなかでの漁だったのである。<sup>29</sup>

南五丁野の御野立所（御小休所）における網漁については次のような話が伝えられている。長い文章で、日付には誤りもあるが、雰囲気をよく伝えるものとなっているので、全文を引用する。（一字空きは段落を示す）『『天子さまがござるとや』明治十四年のことである。天子さまといえば九重の雲の上にござらのお方で、庄内のお殿さまよりも、江戸の天下さまよりもおえらいお方で、仕事はなににもなく、毎朝衣冠束帯で朝日さまをお迎えするのが仕事だどや、こんな認識しかなかった時代に天子さまが文武百官を引き連れて庄内においでになる。長い間の封建社会から目ざめた大衆がこの目で天子さまのお顔を見られるのだ。文字通り空前絶後の感激である。行在所を承る者から歓迎の準備に当たった連中の張りきりかたはまったく想像にかたくなではないか。いよいよ庄内の地にご入駕の天皇が、九月十四日飽海郡西平田の遊擧部（筆者注；ゆすりべ）の南の最上川の土手で、最上川の魚獲り風景を天覧に供することになった。オランダにガラスのコップを注文するやら、ジュウータンを注文するやら金持ちの連中が集まって、できるだけの準備はしたものの、お目にかけるものは地引き網で魚を捕ることだ。必ず大漁であってくればよいがと当局はすこぶる悩んだあげく、この漁の大任を平田町飛鳥（筆者注：あすか）の豪農小野寺加茂助が網元を引きうけることになった。漁師には飛鳥の荒くれ男で、つぶ選りの豪傑連中で、その数三十人ぐらい。その隊長には、明治十年西南戦争で西郷隆盛の軍隊と戦った生残りの佐藤勘助が選出された。明治初年の軍隊は今までの士族ばかりではなく、国民各層から徴集された、まったくつぶよりの偉丈夫連中である。この勘助の命令一下、最上川の冷たい水などまったく問題ではなかったが、はたして鯉も鮭もたくさんかかってくればよいがと、そのみ心痛の種ではあったが、誰の機知か鯉などしこたま買い込んでおいて、いよいよ陛下の前で漁にかかる前に、網の中に放って置いて一芝居打つことになり、鯉の買い集めが始まって、小は三十センチくらいから大は一メートルくらいまでの鯉などをあらかじめ用意しておいて、いよいよその日に網いっぱい放しておいた。いよいよ文武百官を従えた天皇陛下のご覧である。ならぶ幾千人の視線は一斎（原文のまま）に最上川にそそがれた。河に張りめぐらした大網や漁船はしきりに動きはじめて、荒くれ男達の掛声がエイヤ・エイヤと勇ましく響き渡る。網がだんだんにせばめられてきたので、何しろ何千何百と放された無数の魚達はさわぎだし、いわゆる銀鱗をひらめかせたので、たまりかねた漁師たちはひとかかえもある大きな鯉を鷺づかみにしては舟上めがけて投げあげる。いつわ、いるわ、とれるわ、とれるわ。まったく見事な大漁で陛下もたいへんご機嫌うるわしく、なみいる一同は感激にひたった。実はひと皮むけば芝居であったのである。明治時代の庶民のあどけない演出ぶりに、思わずふき出したくなるではないか。』<sup>30</sup> これは「天皇さまの前で演出の大漁」と題された文章である。著者は明治 37 年生まれの郷土史家であるから、これは地元に語り継がれていた話と思われる。

29 2007 年（平成 19）9 月 25 日の日没時間（山形）は 17 時 32 分である。

30 伊藤安記「酒田・飽海の珍談奇談」東北出版企画、昭和 63、p.239 以下

内容の信憑性は高い。最上川の下流域である庄内地方では江戸時代から鮭や鱒の流し網漁がなされていた。流域に伝わる〈鮭の大助〉伝説は漁業がある程度盛んだったことを物語っている。飛鳥村の隣村の砂越村では明治 15, 6 年頃「零細の（漁）業を営むものも五十余名に及んだという。」<sup>31</sup> 150 円の恩賜を受けた「飽海郡有志者」の中には小野寺加茂助や佐藤勘助のほかにもこのような〈漁師〉もまた含まれていたに違いない。今では考えられないほど最上川漁師は多かったようである。しかし夕闇迫る中、増水した最上川で網漁が大漁である、というのは「芝居」でしかありえなかった。

新潟の白川で捕獲された鯉に不審を抱いた佐佐木侍補は今回の行幸にも奏供していた。新潟では無粋ぶりを発揮した侍補であるが、酒田では目をつむったらしい。小野寺加茂助は明治 12 年から山形県の初代県会議員のひとりだったから、両者の政治的な関係も考慮する必要はある。昭和時代のことではあるが、清川で漁師を生業とする鈴木三郎という人の証言がある。清川橋付近のよどみに投網をしたところ猛烈な手ごたえがあった。やっとの思いで網をあげたら体長 1 メートル、3 貫目の「川の主のような大コイ」<sup>32</sup> が 2 本もかかっていた。舟がひっくり返らないか心配したというのである。天覧における「とれるわ、とれるわ」という「大漁」の「芝居」ぶりがわかるような証言である。

巡幸において天覧に供された漁業は網漁がほとんどである。網漁であれば、前もって魚を準備しておくこともできる。「明治天皇紀」では漁業の天覧について、獲物の記述がなされない場合はある。その場合は魚が準備されていなかったのかもしれない。明治元年 9 月 20 日（旧暦）明治天皇は京都から東幸した。途中初めて太平洋と富士山を見たが、漁労の作業を見たのもおそらくこの巡幸が最初である。10 月 9 日午後、大磯の行在所（本陣小島才三郎の家）で地曳網の様子が天覧に供された。「漁夫、湖水を数個の大桶に湛へ、獲る所の鱗介を之に放ち、御座所の前に運搬す、天顔頗る喜色あり」（「明治天皇紀」第一、p.859 以下）大漁だった様子がうかがえる。六大巡幸の最初である明治 5 年西国巡幸の際も、伊勢・五十鈴川で鵜飼が天覧に供されている。捕獲された鮎が献上され、金千疋が対価として下賜された。以後対価を賜るのが定例となる。東幸や六大巡幸の最初から漁業、いうならば〈収穫〉の作業が天覧に供され、しかも大漁だったということは注目すべき事実である。

明治 9 年の奥羽巡幸では 6 月 4 日栗橋の行在所（池田鴨平の家）で利根川の漁獲の様子が天覧に供された。「中流捕鯉の觀を設けて天覧に供するあり、漁夫數人白衣を著して水中に潜没し、争ひて鯉魚を抱きて浮かぶ、其の數總て四十八尾」（「明治天皇紀」第三、p.618）献上に対して対価を賜った。捕獲された鯉の数の多さは、これもあらかじめ生簀の中に捕獲されていた鯉であることを証拠だてているように思われる。しかし漁夫の様子にはそのような演出に対す

31 「平田町史」平田町史編纂委員会、昭和 46、p.317

32 「最上川―歴史と文化―」読売新聞山形支局、昭和 44、p.320

る躊躇は少しもなく、かえって大漁を喜ぶ気持ちが伝わってくる。7 月 14 日浅虫海岸でも「土民網を曳きて天覧に供す、漁する所の魚數桶に滿つ」（「明治天皇紀」第三 p.669 という。やはり大漁だったのである。明治 11 年の北陸・東海道巡幸では 9 月 13 日柿崎から柏崎に向かう途次、東輪（とうのわ）の丘に設けられた小休所でも漁労の作業が天覧に供された。久方ぶりの快晴のもと佐渡島も遠望されるなか、「男女數十人、魚網を岨下に曳きて天覧に供し、且獲る所の魚を數槽に滿てて獻る、其の價を賜ふ」（「明治天皇紀」第四、p.488）晴れやかな大漁の情景が目に見え浮かぶ。その翌日にも出雲崎の行在所（光照寺）の庭において漁業の様子が天覧に供された。夕刻漁船數百艘が海上で点火して作業したのである。この日は残暑厳しく、行在所は狭隘、蚊の襲来もはなはだしかったにもかかわらず、天皇は「（漁業の）壯觀を賞したまふ」（「明治天皇紀」第四、p.490）という。この日はとりわけ強行軍だったため、例刻より早い寝御が奏上された。しかし「天皇聽したまはず、勅して曰く、巡幸は専ら下民の疾苦を視るにあり、親ら艱苦を嘗めずして争でか下情に通ずるを得べき、毫も厭ふ所なしと、拜聞する者感泣せざるなし」（「明治天皇紀」第四、p.490）このような事象が天皇の神話化に貢献するわけであるが、ここでは漁業の様子が「壯觀」だったとあり、いかにも大漁を思わせる記述であることに注目したい。

明治 14 年の奥羽・北海道巡幸においてもこのような漁業の様子が各所で天覧に供された。宮城県名取川、松島湾、岩手県和賀川、青森県浅虫を過ぎた久栗坂村（鯛の網漁）、室蘭、森（ただし侍従長山口正定の代覧）、土崎と秋田（いずれも雄物川）そして岩見川の鵜飼がある。山形県では 9 月 23 日新庄から清川に至る途中、古口の昼餐所（小林治橋の家）で網漁が天覧に供されている。「山形縣行幸記」によれば「村民柿崎七右衛門、安食芳蔵等十餘名、網魚して。天覧に供へたてまつり、その獲る所の鯉、鯰等を獻ず。」<sup>33</sup> 庄内巡幸を終えて山形に向う途中の名木沢村上原でも漁労が天覧に供された。最上川に面した高台に設けられた小休所において、村民による鮎漁を天覧したのである。そこに立つ行在所記念碑の碑文からは眺めよく晴れやかだった漁の様子を知ることができる。楯岡の灌漑用のため池では、物産や村民の相撲の天覧と並んで網による漁獲の様子が天覧に供された。珍しいことに鰻が獲物として献上されている。上原や楯岡の天覧については「明治天皇紀」に記述されているが、古口における網漁については言及がない。「明治天皇紀」において言及されていないこのような事実は他にもあったと考えられる。

漁業と農業のほかには東北の特色として馬産に関係したことがよく天覧の対象となった。明治 9 年の巡幸では青森の新設の馬見所（私設）で一種の競馬がなされたこともある。特に知られているのは同じ明治 9 年に岩手県の盛岡八幡宮の馬場における 4 百頭以上の馬の天覧である。「本縣産馬四百餘頭を牽かしめて覽たまひ、村老一人歌を謠ひつつ先行す」（「明治天皇紀」第三、p.658）右大臣岩倉具視と顧問木戸孝允を脇に侍らした天覧の光景は聖徳記念絵画館の壁

33 「山形縣行幸記」p.113 以下



画の中でも印象的な絵のひとつである。「五色の布で美しく飾られた馬の行列は、4, 5 百頭も続きました。そのあと、軍馬の曲乗りや豊年踊りなどをご覧になりました。天皇は、当時軍馬が軍用、産業開発上重要なものとして、その改良を奨励されました。」<sup>34</sup> 宮崎のいうように巡幸では「地域産業」が奨励され、「富国強兵」が求められたのである。明治 14 年の巡幸では 8 月 26 日に七戸村民が大沢田馬洗場の御野立所で産馬数百等を野に放って天覧に供している。同じ明治 14 年の巡幸では 9 月 9 日黒石から弘前の行在所（武田清七の家）に入る前、八幡崎村に小休所が設けられた。小休所は馬耕伝習所だった。「傳習所生徒が馬耕の實習を爲すを天覧あり」（「明治天皇紀」第五, p.485）という。乾田馬耕は当時としてはまったくの最新技術である。田の馬耕については、たとえば山形県本沢村（現山形市）では大正 6 年頃から始まったという記録がある。<sup>35</sup> このように巡幸は紡績に限らず農業の最新技術の視察と普及も目的のひとつであった。「富国強兵」の道である。

漁業以上に目立つのは農作業の天覧である。行幸の行く先々で田植えや草取り、そして刈り入れの様子などが天覧に供されている。聖徳記念絵画館にも明治 14 年奥羽・北海道行幸の時の農作業天覧の絵画「北海道巡幸屯田兵御覧」が展示されている。9 月 1 日札幌郊外の山鼻村で、屯田兵とその妻達が藻岩山を背景にして畑の耕作をしている光景である。（麦の蒔きつけと思われる。麦まきは明治 14 年の巡幸の際に秋田県でも天覧に供されている。9 月 18 日のことである。）天皇の馬車に覆いはない。「九月一日 午前九時御出門。札幌郡眞駒内牧牛場に幸し、牧畜の情况及び刈麦器・脱稃器等の運轉を天覧、…石山新道を山鼻村に幸す、屯田兵舎の在る所なり、屯田兵の農業に従事する状を通覧したまひ」（「明治天皇紀」第五, p.470）という情景の絵である。牧畜や刈麦器・脱稃器もまた最新の農業であり、最新の機械だったはずである。絵画「北海道巡幸屯田兵御覧」でも遠くの畑で馬耕作業をする人の姿が見える。

農作業の天覧の中で多いのは田植えと稲の収穫である。それは東北地方で目立つ。明治 9 年の巡幸では 6 月 2 日最初の行在所（大川弥惣右衛門の家）がおかれた草加の手前の保木間村で田植えの様子が天覧に供された。翌日の 6 月 3 日は午前 4 時起床、7 時発輦で幸手に向かった。（時刻は常例である）その途中蒲生村で同じく田植えの様子が天覧に供された。「鹵簿蒲生村に進むや、少時輦を駐めて挿秧の状を覽たまふ、一望水田にして水車處々に廻轉し、農民二百餘人點在す、女子は苗を植ゑ、男子は馬を役し苗を荷ひ、謠歌の聲遠近に聞ゆ」（「明治天皇紀」第三, p.616）絵のような光景が展開された場所は現在の越谷市南越谷一丁目 5 番地 9 号とおぼしく、忠魂碑など一群の記念碑が並ぶ整備された小公園の中に「明治天皇田植御覧之處」なる記念碑（越谷町教育委員会。昭和 31 年 6 月 3 日建立）がある。日光街道に面していて、あたりに住宅やマンション・店舗等が立ち並んでいる。公園の隣は大手コンビニチェーンの新越谷店

34 「明治神宮聖徳記念絵画館壁画」明治神宮外苑、平成 13、p.77（35、「奥羽巡幸馬匹御覧」）（以下では「聖徳記念絵画館」と略）

35 「明治のくらし—農民の一生 山形市本沢地区の民俗」山形市二位田明門寺尚古館、昭和 58、p.126 参照



である。往時の面影を偲ぶことができるものはない。蒲生村の情景はのどこかであるが、しかし田植え作業というのは本来非常に忙しいものである。この情景はむしろ祭祀的な印象がある。ここでの田植えは古来の神事としての意味が強かったのではないだろうか。またこの巡幸では麦搗きや水田の草取りも天覧されている。明治 14 年の巡幸がなされたのはすでに田植えは終わった時季であるから、田植えの天覧はなかった。8 月 21 日に岩手県稗貫郡において男女が歌を歌いながら麦を臼で搗く様子や 9 月 11 日秋田県釈迦内村で村女 12 名が早稲を刈るところが天覧に供された。明治天皇はすでに明治元年 9 月 27 日、東幸の途中で稲刈りを天覧したことがあった。熱田の行在所（徳川徳成の西浜別邸）を出て浜新開松原における天覧である。その時は輔相岩倉具視が「農民に命じ稲穂を得、天覧に供したてまつる」（『明治天皇紀』第一、847）という。その情景は聖徳記念絵画館の壁画にもなっている。農民に対しては名古屋の老舗つくは弥屋の饅頭 3000 個が下賜されたという。<sup>36</sup> 赤坂仮皇居内には水田があって、農夫一家が住み込んでいた。「天皇、皇后は、時どきその耕作の状況をご覧になりました。」<sup>37</sup> という。天皇と稲作の深い関連がうかがわれる。

明治 14 年 9 月 19 日角間川村の行在所（本郷吉右衛門の家）に向かう途中、花館村を過ぎたところで男女数十人が稲を扱き、精米して俵に入れる作業が天覧に供された。同様の作業は 10 月 1 日、庄内巡幸のあと山形を経て置賜平野で赤湯から高畠村の行在所（東置賜郡役所）に入る手前でも行われた。聖駕が赤湯から米沢に直行せずに高畠に回り道することについて、住民の喜びは大きかった。「赤湯より高畠村に至る間一里二十餘町、道路に白沙を布きその左右に欄を設け、又五町及至十町毎に欄を架し、幣帛・酒饌を供して男女地上に跪拜す、其の狀神明に對するが如し、…小松村有志は雅樂を奏して聖駕を迎へたてまつり、竹森村民等は、稲を刈りて之を藁し之を簸し精米と爲すの作業を行ひ、高畠村民等は、餅數萬個を投じて豊穰を祝するの狀に擬し、以て天覧に供す」（『明治天皇紀』第五、p.520）稲刈りは翌日高畠から米沢に向かう途中川井村でも天覧に供された。ちょうど稲刈りの最盛期だった山形県においては行幸が豊穰のイメージと結びついて受け入れられたのである。「神明」とは天照大神の尊称でもあるが、しかし「酒饌」や「餅數萬個投じて豊穰を祝する」という言葉からは別の印象を受ける。「神明」はむしろ「超自然的な存在。あらたかな神」（小学館「日本国語大辞典」第二版）を意味していると思われる。（それが天照大神も含有している可能性はあるが。）「日本国語大辞典」には後者の意味の用例として 1873 年「尋常小学読本」が引用されている。「総て小兒は、神明を畏敬して、我身の幸を、願はむとならば、善き心を持ち、善き道を行ふべし」というものである。高畠村民は天皇を「神明」迎えるような気持ちで迎えたのである。その様子は村の神社の例祭を彷彿とさせるものがある。「沿道の送迎の人々は幣帛、酒饌を供え道には盛砂をしき、神々しい様

36 「聖徳記念絵画館」p.39（16.「農民収穫御覧」）及び「週刊 再現日本史」第 18 号、講談社、平成 13、p.8（つくは弥屋現当主の証言）参照

37 「聖徳記念絵画館」p.71（32.「皇后宮田植御覧」；明治 8 年 6 月 18 日）

子であったと言う。…高畠の入り口では五十余名の男女農装して稲を刈り、精米の状を実施し、餅数万ヶを投じて拝観者をして拾はしめ田家農稔祝の演出をした。」<sup>38</sup> 豊年を祝うお祭りを彷彿とさせる描写である。また高畠に限らず行幸の列に対して酒や鏡餅などが供えられた例はほかにいくつもある。

庄内の巡幸では 9 月 26 日酒田から清川に向う途中に稲刈りの作業が天覧に供された。「午後一時十分騎馬にて酒田を發せらる、里餘にして最上川渡船場あり、松嶺町民三十人倭杖の技を演じて天覧に供す、倭杖とは劍舞に等しき技なりと云ふ、水勢昨日より減ず、渡航して新堀を過ぎ、余目村驛端にて農民稻を刈るの情況を天覧、廻館村・狩川村を経て五時二十五分清川村に着御、行在所東田川郡中学校兼清川小学校に入りたまふ、是の日道程六里餘、總て騎行したまふ」(「明治天皇紀」第五、p.509 以下) 天皇は余目村の小休所(佐藤善治の家)すぐ手前の字谷地田に駐輦して稲刈り作業を天覧したのである。

余目村驛端における稲刈り作業の天覧の様子を描いた絵馬が余目八幡宮に奉納されている。<sup>39</sup> 騎馬 4 頭を先頭にして、赤地に黄金の日の丸の天皇旗の白馬が続いている。それに紅白の三角旗を掲げた 4 頭の騎馬が従う。さらに 2 頭の騎馬に続いて天皇の二頭立て馬車が描かれてある。馬車は黒地に金色の縁取りがあり、御者 2 名が手綱をとっている。車内に腰掛ける天皇は金モールの上着に白いズボンで、無帽である。馬車はちょうど小川にかかる板橋(桁形橋)に乗り入れたところである。白い鳥海山を遠くにして、左から右方向に進んでいる。手前やや右手の田園では 29 名の農民が三列になって稲の刈り取りをしている。稲を刈る者 26 名、刈られた稲を乾燥のためにはせ掛け、くい掛けをする者 3 名である。全員そろいの紺色の着物姿である。稲刈り作業をする人たちの後ろには金モール、金ボタンの黒い礼服姿の男性 3 名が直立している。絵馬には稲刈り人名が 2 段にわけて書かれている。すべて男性名であるが、絵馬に描かれているのは男女半数ずつくらいである。29 名の名前の先頭には横並びに「戸長上野潤六、人民惣代佐藤清三郎、同齊藤良輔」と書かれている。洋装の礼服姿の 3 人であろう。絵馬に描かれている人物はことごとく笑みを浮かべている。顔を下に向けている者はひとりとしてなく、稲を刈っている者も顔を左前方に上げて笑みを浮かべている。豊作をこころから喜んでいる気分が伝わってくる絵である。鳳輦の中から視線を収穫作業に向けている天皇もまたほのかな笑みを湛えているようである。(天皇はこの日はすべて「騎行」だったはずではあるが。)

この稲刈り作業はのちのちまで参議大隈重信の記憶に残っていたらしい。大正 4 年(1915)、「人民惣代佐藤清三郎」は余目町の町長となって上京した。大隈は「佐藤清三郎町長が請願に参上した時、稲刈りの折の印象を詳しく話されたという。」<sup>40</sup> のである。絵馬の全体をおおう一種晴れやかなと言うべき気分が現場に実際に存在して、それが大隈の脳裏に深く刻み込まれたの

38 「明治天皇行幸記」山形県東村山郡史蹟保存会(発行)、昭和 39、p.13

39 「余目町史」下巻、見開きカラーページ参照

40 「余目町史」下巻、p.108

ではないだろうか。絵馬の画人については仙台の呂村としか今のところわからない。しかし同じ余目町内の御殿町八幡神社に明治 17 年 8 月 15 日奉納という「敬愛講の図」という絵馬があって、作者 5 名のひとりがやはり呂村である。明治 15 年に奉納された稲刈り作業天覧の絵馬は巡幸の記憶がまだ鮮明だった頃の絵馬ということができる。絵馬にただよう晴れやかな、豊穣を喜ぶような祝祭的な気分は現実存在した雰囲気を反映したものと考えられるのである。

明治 14 年 9 月 25 日天皇は最上川を渡り、南五丁野に設けられた御野立所で網漁の模様を天覧した後、酒田の町に入った。「明治天皇紀」は次のように記述している。「六時後酒田に著御、行在所に入りたまふ、行在所は東田川郡田谷村の富民渡邊作左衛門の家にして、其の結構實に広壯輪奐なるに、今次更に土木を起して樓上に玉座を設け、欄外の屋上に樹石・花卉を栽植して庭と爲す、聖駕是の地を發するの後、館主衆に許すに御座所拜觀を以てす、遠邇の士女陸續として到り、或は玉座の敷物、或は柱聯を摩しては己が體を撫し、而して無病を祝し安産を祈る者多かりしと云ふ」（「明治天皇紀」第五、p.508）まことに前近代的な出来事と言わなければならない。民衆は天皇に「無病と安産」をもたらし存在をみたのである。大正 11 年に宮内省で編集した明治 14 年の巡幸資料に行在所館主渡邊の談話が載っているという。「主上行幸ノ節行在所ヲ勤メタル後、越後地方・秋田地方又は最上辺マテ陸續トシテ僕ガ家ニ尋ネ来リ、是非行在所ナリタル座敷ヲ拝見シタシトノ事ユヘ、初メノ程ハ拒ミタレドモ却テ嫉マレルユヘ十日間縦覧ヲ許シタリ、然ルニ男女老若沸カ如クニ入ル来ルユヘ門扉一枚ヲ踏ミ破ラレタリ、後ニハ門扉ノ前ヘ矢来ヲ結び切符ヲ与ヘ拝觀サセタル位ユヘ十日間ニテ縦覧人凡ソ十万人ナルトゾ、辺僻ノ者ハ正直ナルモノニテ玉座ニナリタル敷物ヲ手ニサスリ我ガ体ヲ亦サスリテ、カクスレバ一生無病ナリト悦ベリ、又女子ハ柱カクシヲサスリテ自分モノ身ヲサスリ、斯クスレバ産ガ輕シトテ有難カリシト云、今ノ世ニ当リ諸国民權ナド唱ル者アレドモ、皇沢ノ民ニ入ルスクノ如ク深ケレバ新舶来ノ自由説ナドニテハ容易ニ動クハ致ス間敷ク、必ズ御安心ナサレト、余ニ語レリ」<sup>41</sup>「明治天皇紀」編纂については、大正 3 年 12 月に宮内省に臨時編修局が設置されて事蹟編修が開始され、昭和 8 年 9 月に完了したものである。行在所館主の渡邊はすでにないが、明治 14 年 12 月に山口正定に語ったものである。それはおよそ「近代天皇制国家」に似つかわしいとは言えない事態であった。

A・M・ホカートは「王権」（1927）において「現在われわれが知りうる最も初期の宗教は、王の神性に対する信仰である。…多分どんな王も神なしでは、またどんな神も王なしでは、存在しなかったであろう。」<sup>42</sup>と述べている。フレイザーの「金枝篇」には酒田の行在所の出来事を彷彿とさせる記述がある。「マレー地方では全地域を通じて、ラジャすなわち王は一般に超自然的な力の所有者として宗教的な尊敬をうけているが、彼もまたアフリカの酋長と同じように単なる呪術師から進歩発展して来たと考えられる証拠がある。マレー人は今日でも、王は農作

41 「酒田市史」改訂版・下巻、酒田市史編さん委員会、平成 7、p.290

42 A・M・ホカート（橋本和也訳）「王権」（1927）人文書院、1986、p.17

物の成育とか果樹のみのりなどのような自然の働きの上に、人格的な影響を及ぼすことができると固く信じている。このような多産豊穰の力は、やや少ない程度においてはあがあるが、彼の代表者にも、偶然その地方に駐在しているヨーロッパ人の人格の中にすら宿ると考えられている。たとえば、マレー半島の土着民州の一つであるセラングルでは、しばしば稲作の成功不成功の責任が、その地方に駐在する地方官に帰せられることがあった。…サラワクのダイヤク族は、彼らの有名な英人統治者であったブルーク王がある種の呪術力を賦与されていて、それを適当に応用すれば稲の収穫を豊かにすることができると思っていた。そこで彼が部族を巡視すると、土着民たちは次の年に播く種子をその前に持って来るのであったが、彼はあらかじめある混合液に浸して置いた女の首かざりを種子の上でふって、次の収穫を豊かにしてやった。また彼が村へ入って行くと、女たちは彼の足を水で洗い、次には未熟なココナツの乳汁で洗い、最後にまた水で洗い清めたが、彼の身体に触れた水を畑に注いでやると必ず良い収穫が得られるというので、この水は貯えられるのであった。」<sup>43</sup> ブルーク王の行為は近代科学的な消毒と考えられる。それは支配の目的にかなうものだったが、「土着民」の〈前近代的〉な信仰に対する〈近代〉の一種の背反である気もする。

酒田あるいは庄内地方には共感呪術やそれに類するような前近代的な雰囲気が残っていたということが考えられる。浄土真宗の親鸞は「念仏以外の行（持戒もその一つである）を雑行として否定した。」<sup>44</sup> という。ところが庶民にあっては違っていた。「門主が湯船に漬かった湯をもらい受け、病氣治しに用いるという風儀すら行われていた。現今でも特定の地方によってはその遺風が残っているところもあるといわれる。」<sup>45</sup> そして酒田には浄土真宗の信者が多かったという。「酒田は日本海に面した湊町だけに昔から浄土真宗が盛んな土地柄だった。ことに湊町として発展してきた酒田町組（下通り）には御門徒が多い。…（享保十二年には）酒田町組では浄土真宗が四、三六〇人で、四五・二％になる。浄土宗を加えれば六二・八％という圧倒的な数字になる。」<sup>46</sup> 62.8 パーセントとはたしかに驚くような比率である。全体でも 54.6 パーセントという。明治 13 年「東北巡錫の旅」<sup>47</sup> をした浄土宗東部管長の増上寺福田行誠師は「魔仏の影響の少ない東北の人たちの素朴さに感じ入っ」たという。念仏を唱えてもらうために草上で正座して待っている人がいたのである。それは前近代的な態度かもしれない。しかし東北にはそのような雰囲気が色濃く残っていた。

庄内におけるそのような雰囲気は幕末に近い天保 11 年（1840）から翌年にかけて勃発した三方領知替え事件からもうかがうことができる。庄内藩の領地替えが中心で、地元の強力な反対運動は藤沢周平の小説（「義民が駆ける」）にも詳しい。一揆の経過は終了後に地元で挿絵付き

43 フレイザー（永橋卓介訳）「金枝篇（一）」（岩波文庫）p.199 以下

44 松尾剛次「鎌倉新仏教の誕生」（講談社現代新書）1995、p.158

45 豊島泰国「日本呪術全書」原書房、1998、p.322

46 田村寛三「さかた風土記」さかた風土記刊行会、平成 10、p.367

47 「浄土宗山形教区史」浄土宗山形教区史編纂委員会、平成 3、p.5



で経過がまとめられた。「夢の浮橋」である。「三方領地（筆者注；原文のまま）替え反対一揆を描いた『夢の浮橋』では、一揆の成功を祈る僧侶や烏海山の山伏が頻繁に登場する。」<sup>48</sup> なかでも日蓮宗玉龍寺（山形県飽海郡遊佐町）の十一世文燐（寛政 12—文久 3）は一揆の中心人物でもあって、江戸に赴いて上野・寛永寺の執当に対して駕籠訴まで行った。同じく中心人物の一人で、鶴岡の旅籠主人にして目明しでもあった加茂屋文治は異母弟である。文燐は「霊媒能力を持っており、加持祈祷に効験を発揮した」<sup>49</sup> という。岩淵は一揆においては百姓と僧侶たちの連携は祈祷以外には難しかったのかもしれないとして、「では、文燐がなぜ運動の中心人物となりえたのか。これは三方領知替え反対一揆研究の一つの課題であろう。」<sup>50</sup> としている。本間家の「お気に入り茶坊主」<sup>51</sup> としてその意を体して奔走したという説もあるが、もしかしたら文燐の「霊媒能力」に対する一揆の参加者の期待とでもいうものがその答えになるかもしれない。「夢の浮橋」には「棒の先に鍬の刃を逆さにつけた長沼組の目印」<sup>52</sup> が描かれている。藤島村の六所神社等における 2 度にわたる農民の大集会の図のそれぞれに目印として描かれている。それは単に農民を意味しているだけではないだろう。それは「鍬神信仰」<sup>53</sup> に関わるのではないだろうか。宮田登によれば鍬神とは、伊勢神宮の御師が桑の木で作った鍬形のご神体をかついで村々を練り歩いて災厄を払ったことをいう。実際長沼村をはじめ周辺の集落には皇大神社が少なくない。そもそも庄内地方には皇大神社が多い。<sup>54</sup> 皇大神社はおおむね伊勢神宮の内宮と同じく天照大神を祭神としているから、伊勢講も含めて庄内地方にも「鍬神信仰」が知られていたことはありうる。鍬にはこの一揆におけるいくつかの目印のひとつであるという以上に、厄災払いという呪術的な意味がこめられていた可能性がある。また文燐の弟子に日栄なる僧がいて、酒田・藤崎の寺の住職になった。「師匠の文燐も霊媒能力を持っており、加持祈祷に効験を発揮したが、日栄は師にまさる霊能力の持主だった。戊辰戦争のときには庄内軍に祈祷僧として従軍し、三崎山（筆者注：庄内藩と秋田の境界付近。現山形県東田川郡遊佐町吹浦地内）等で木剣加持をすると、秋田兵が恐れをなして退散したと伝えられている。…戊辰戦争での霊験から日栄は庄内藩主酒井家の信用を得て、明治初年に、焼けた藤崎の寺の代わりとして下台町（松の山）の一角の、八百余坪をもらい、そこに大慈悲院を建てようとした。その資金集めの最中に、病を発し、とうとう実現しないまま、佐渡島でなくなった。もともと日栄は新潟県の生まれで、三条市にある法華宗日陣派の大本山本成寺（妙法寺の本山）でも修行したという。日栄の加持は効験がいちじるしいところから本間家からも信用され、病魔払い等で度々よばれた。加護の

48 岩淵令二：僧侶たちの駕籠訴（「地鳴り山鳴り」p.28）

49 田村：前掲書，p.316

50 岩淵，前掲書，p.28

51 黒田伝四郎編・高畠真平易文訳「庄内転封一揆の解剖」良書センター鶴岡書店，2004，p.57

52 「地鳴り山鳴り」p.21

53 宮田登「民俗神道論—民間信仰のダイナミズム」春秋社。1996，p.66

54 庄内地方の神社総数 817。うち皇大（太）神社は 192 社。東田川郡は 102 社で郡全体の 33 パーセントに及ぶ。「山形県神社誌」（山形県神社庁，平成 12）に拠る。廃仏稀釈令等によって種々変更が起こったので，上記は目安である。



とき、日栄は、戸障子を全部あけさせ、病魔が出やすいようにした。…戊辰戦争だけでなく、ペリー艦隊が浦賀に来航したさいも、まだ若かった日栄上人が艦隊が何事もなく米国に帰るようとの祈禱を幕府から頼まれたと、大倉家では語りつがれている。」<sup>55</sup>「木剣（ぼっけん）加持」とは日蓮宗の加持祈禱のひとつであるが、日栄の加持祈禱の効験については、敵の兵士が恐れて退散するほど評判が広まっていたということになる。庄内軍に対して秋田側は殆ど全線で破られる。秋田兵の装備や戦意に問題があったのは確かであるが、三崎山の戦闘では日栄の「霊能力」が勝因のひとつとして考えられる。酒田の行在所における出来事を招く背景はあったのである。

4

「一般の民衆は天皇に対して封建時代以来の無関心のまま明治という時代に入り込んだ」<sup>56</sup> という。そのことは東幸を描いた錦絵からも知ることができる。明治元年 10 月 13 日、明治天皇が品川を発し、増上寺から皇居に向かう途中の「東京府銀座通之図」（魁斎芳画）がある。行列の両側には商家が並び、鳳輦は京橋を渡りかかったところである。綱の背後には見物人が櫛比している。綱の前やあるいは最前列で膝まついて拝賀する者もいるが、それはごく少数である。衣服などからして町役人風である。鳳輦の内部はまったく見えない。<sup>57</sup> この時には小手をかざして鳳輦を見物する江戸の庶民を描いた錦絵も存在する。<sup>58</sup> そこからは崇敬の態度は感じられない。見物という形容がふさわしい。明治 9 年の奥羽巡幸の時には宮城県で、役人にうながされてようやく居ずまいを正す農婦がいたという。岸田吟香が東京日日新聞に掲載した記事である。「田野山林の間を過ぎ玉ふに、拝見人も所々に居れども、みな股引をはきたる娘や、鎌鋤を携へたる農夫どもにて、泥足を田の畦に並べ、草に居り敷き、石に腰かけなどして、丸裸の赤子を背負ひたるまま、背中より脇の下へ小児の頭を引出し、乳を吞する婦人などもあり、顔も足も泥によごれたるまま、昼寝せしが、ソレお通りぞや、拝まぬかと、俄に叩き起こされて、目をこすりながら、鳳輦を拝するもありて、最と可笑しき事どもなりき」<sup>59</sup> 日本人のそのような態度を不思議に思った外国人にドイツ人医師ベルツ（Erwin Bälz；1849-1913）がいた。

ベルツは明治 13 年（1880）11 月 3 日の日記で慨嘆している。「天皇誕生日。この国の人民がその君主に寄せる関心の程度が低い有様を見ることは情けない。警察の力で、家々に国旗を立てさせねばならないのだ。自発的にやるものは、ごく少数だろう。」<sup>60</sup> 日本には誕生日を祝う習慣がなかったという理由だけではなく、ベルツをもっともいらだたせたものは天皇に対する一

55 田村、前掲書、p.316 以下（「注」によれば大倉家は日栄関係の資料を保管）

56 多木浩二「天皇の肖像」（岩波新書）1988、p.6

57 丹波恒夫「錦絵に見る明治天皇と明治時代」朝日新聞社、昭和 41、p.42 及び日本歴史シリーズ第 18 巻「明治維新」（世界文化社、昭和 43）p.10 参照

58 朝日百科日本の歴史（新訂増補）10「近代 I」2005、p.316 参照

59 伊藤重道「東北民衆の歴史―近世・維新編」無明舎出版、2006、p.384

60 トク・ベルツ編（菅沼竜太郎訳）「ベルツの日記」（上）（岩波文庫）1992、p.114

般の崇敬の念の希薄さだったはずである。ドイツでは皇帝に対する崇敬の念があふれていたのである。ベルツは 1866 年からチュービンゲン大学で医学を学んだ。大学では学生組合ゲルマニア (Burschenschaft Germania) に属して、「ドイツ帝国統一への強い願望を学生運動で表現したのであった。」<sup>61</sup> この学生組合は 1862 年に詩人ウーラント (Ludwig Uhland) を名誉会員に加えている。ウーラントはドイツ統一を欲する人びとの象徴的な存在となっていたのである。ベルツは普仏戦争でプロイセン皇太子旗下の師団に見習軍医として入り、セダンの戦いにも参加した。日本行きの話が持ちこまれたのは 1875 年 (明治 8) 末である。ベルツの日記は長男トク (Toku Bälz) によって、書簡や所感などと合わせて 1930 年 (昭和 5 年) にドイツで出版されたものである。原題は „Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan“, すなわち「目覚めつつある日本におけるあるドイツ人医師の生涯」である。原題は本人の関知するところではないかもしれないが、しかしその日本観が現れている。「日記」(下巻) には「むすび」の一部として「明治天皇をしのぶ」という所感が収められている。ベルツは明治天皇について、はじめは政治的にまったく無力で「金のかごに閉じ込められた小鳥にすぎなかった」<sup>62</sup> のに、「やがて、現実でも政治上の権力がかれに返還される時が来て、かれは絶対的の君主として、昇る太陽の国を支配することになった。…立憲君主としてのかれは、世界から従来ほとんど完全に遮断されていた自国を、世界の運命におのずと関与する一大強国にまで発展させた。ところがかれが世を去ったとき、天皇を神格化する見方が依然として強く国民の間に生きていたことを示すあらゆる言動を、その葬儀の際に見せつけられて、ヨーロッパは一驚した。ヨーロッパの君主が、その国家と国民に対して占める地位に比べて、おそらく日本の天皇の地位は、簡単に定義すれば、次のように言えるかもしれない―すなわち天皇は、単なる人格を表すというよりも、むしろ、ある観念の人格化されたものを表すと。従って、日本の天皇は、ドイツの『ウィルヘルム』とか、イギリスの『エドワード』というよりも、むしろ『ゲルマニア』とか、『ブリタニア』というのに近い。」と考えている。しかし「ウィルヘルム」もまた「ゲルマニア」に近かったのである。

ヴィルヘルム一世 (1797-1888) は 1861 年に後継者のいない兄フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世 (1795-1861) を継いでプロイセン国王になった。そのときすでに 64 歳である。多くを期待されたとは言いがたい。ところが 1864 年シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン公国をめぐる戦争でデンマークに勝ち、1866 年にはデンマーク戦争とともに戦ったオーストリアに勝った。オーストリア側にはバイエルン、ハノーファー、ザクセン、ヴュルテム各王国やバーデン、ヘッセン、ダルムシュタット各大公国そしてカッセル選定侯国などいわば大国がついたのに、プロイセン方についたのは北部の中小国家が多かった。それにもかかわらずプロイセンは勝った。プロイセンはオーストリアを除いたドイツ統一を目指していたから、この勝利によってプロイ

61 「ベルツの日記」(上) p.5 (酒井シツ「エルウィン・ベルツのこと」)

62 「ベルツの日記」(下) p.420 以下

センを中心とするドイツ統一が現実性を増したのである。ドイツ統一をめぐるオーストリアとプロイセンのヘゲモニー争いの終結である。そして 1871 年にはフランスにも勝って、ドイツ帝国が成立することになった。ヴィルヘルム一世はプロイセン国王に加えてドイツ皇帝になった。政治面では宰相ビスマルクの影に隠れ、押されるばかりの皇帝であった。しかし偉丈夫だった皇帝の質素で篤実勤勉な性格を伝える逸話が多い。経費を理由としてベルリンの王宮にお湯の風呂を設けることに反対して、皮製の水風呂に入ったとか、執務机では上着が汚れるのを恐れて袖カヴァーをつけて執務したとかいう話である。自分の馬車の車輪をゴムタイヤにするのにも贅沢ということで頑固に拒否したという。兄王に子供がいなかったため早くから〈プロイセンの皇太子〉と呼ばれていたとはいえ、「この老人が九十一歳まで王位にあり、その間にオーストリアとフランスという二大国を完全に武力で制圧し、プロイセン国王にすぎなかった彼がドイツ帝国を統一してドイツ皇帝になろうとは誰一人として想像した者はいなかった。」<sup>63</sup> 少し言い過ぎと思える。しかしヴィルヘルム一世自身がプロイセン国王であることのほうに重きをおいて、ドイツ皇帝の地位は「しぶしぶ引き受けた」<sup>64</sup> とされる。1848 年のベルリン 3 月革命の際には鎮圧のために武力を行使して〈榴弾皇太子〉と恐れられ、事件後は一時ロンドンに退避せざるをえなかった人物である。兄で才気あったフリードリヒ・ヴィルヘルム四世がリベラル派の要求を容れるところがあったのとは対照的である。ところが帝国誕生後は〈ヴィルヘルム勝利王 (Wilhelm der Siegreiche)〉とか〈老ヴィルヘルム (der alte Wilhelm)〉と呼ばれて人気は高まった。

ヴィルヘルム一世は毎日衛兵の交代儀式を見るために定刻に王宮の窓辺に姿を見せた。すると下に集った人々は万歳の声をあげるのであった。「帝国創建以来というもの国民からどんどん好意と崇拝が与えられ、菩提樹の上に張り出していた執務室の角の窓の下には人々が集り、皇帝が姿を現すと万歳と叫んだ。」<sup>65</sup> ヴィルヘルム一世は〈大王 (der Große)〉と称されるまでになる。大王といえばフリードリヒ大王であったのに、その子孫がまた同じ大王という呼び方をされることになった。「ふたりのホーエンツォレルンの支配者はその世界に新時代を構築した業績」<sup>66</sup> によって大王という尊称をもらったのである。それはヴィルヘルム一世の孫ヴィルヘルム二世 (Wilhelm II.; 1859-1941。在位 1888-1918) の政策にもよっていた。ヴィルヘルム二世は「国民による祖父ヴィルヘルム一世崇拝」<sup>67</sup> を実現することによってホーエンツォレルンの威厳や名声を後継者たる自分に重ね合わせようとしたのである。そのためヴィルヘルム二

63 渡辺昇一「ドイツ参謀本部」(中公新書)昭和 63, p.128

64 Jürgen Mirow „Geschichte des deutschen Volkes“ Kasimir Catz Verlag,1990,S.729

65 Michael Stürmer „Das ruhelose Reich Deutschland 1886-1918“ (Siedler Deutsche Geschichte) Siedler Verlag, 1994,S.238

66 Christopher Clark „Preußen, Aufstieg und Niedergang 1600-1947“ Deutsche Verlags-Anstalt, 2006,S.671

67 Heinz Schilling „Höfe und Allianzen, Deutschland 1648-1763“ (Siedler Deutsche Geschichte) Siedler Verlag, 1994,S.372

世は祖父ヴィルヘルム一世の銅像や記念碑の建立を推進した。1904 年の時点でその数は 372 に達していたという。<sup>68</sup>多くはヴィルヘルム一世の没後のものである。しかし 1867 年にすでにベルリンに騎馬像が作られたから、その崇敬の雰囲気はすでに醸成されつつあったのである。大王という名前は定着しなかったが、〈老ヴィルヘルム〉という愛称はフリードリッヒ大王の〈老フリッツ (der Alte Fritz)〉という呼び方になっている。ヴィルヘルム一世はフリードリヒ大王と重ね合わせてイメージされたのである。

天皇の存在はあまり意識されなかったという。江戸時代の民衆は藩主を意識し、その上の将軍を意識したが、「さらにその上に天皇が存在するという意識は、幕末まで希薄だった。…したがって近代天皇制にとって、それまで民衆に認知されていなかった天皇を、いかに認知させるかということが、まず最初の課題であった。」<sup>69</sup> 鳳輦を手をかざして見る江戸市民や、役人にうながされてやっと鳳輦を拝む宮城県農婦などは認識の薄さをよく示している。その対応策として大久保利通などによって、天皇を人目にさらすことが実行されたというのが多木浩二の指摘である。「大久保らはなにをなすべきかをよく心得ていた。つまり長く続いてきた封建時代の天皇と民衆の疎遠な関係が、新しい国家の権威を打ち立てるには妨げであり、これを打ち破るには、まず、天皇を一般の人びとの眼に見える存在にし、印象づけなければならないことに気がついていたのだ。大阪親征、東幸などの一連の政策によって、天皇の視覚化というそれ自体は政治的とは言えない手段によるひとつの政治的歴史がはじまった。」<sup>70</sup>「大久保ら」がどこからその知識を得たかは不明である。しかし明治 4 年に岩倉具視を特命全權大使として米欧に派遣された使節団の見聞が「天皇の視覚化」に大きく影響した可能性がある。「大久保利通は、天皇はヨーロッパの君主の慣例に倣って臣民の前に姿を現わすべきである、と機会あるごとに言い続けてきた。大久保の確信は、次のことにあった。天皇は、幾重にも囲まれた御所の奥深く隠された神秘的な存在から臣民に親しまれる目に見える存在へと変わらなければならない、それは政治的に不可欠のことである、と。」<sup>71</sup> 大久保は副使として岩倉使節団に同行し、確信を強めたということが考えられる。ドイツでは皇帝ヴィルヘルム一世の「可視化」が進められていたのである。

岩倉使節団は明治 4 年 11 月 12 日（旧暦；新暦 1871 年 12 月 23 日）に横浜を出航した。アメリカ合衆国とヨーロッパ諸国を訪問して、明治 6 年 9 月 13 日（1873 年；すでに新暦採用）に帰国した。2 年近くに及ぶ大旅行である。目的は諸国の政府宮廷と交歓し見聞をひろめ、幕末に結ばれた不平等条約改正の準備をすることだった。外務卿岩倉具視を正使として、参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳など総勢 48 名の多さである。六大巡幸によく同行することになる佐佐木高行も参加している。留学生を含めるならば出発時には百

68 Clark, a.a.O.S.646 参照

69 山本幸司：王を巡る視線，序論（岩波講座「天皇と王権を考える」10，2002，p.4）

70 多木，前掲書，p.6

71 キーン，前掲書，p.336

名を越していた。参議の西郷隆盛と大隈重信は日本に残留したが、まるで明治政府がそっくり海外に移動したかのようである。

ドイツは一行に強い印象を与えた。近代国家のイギリスやフランスよりは、まだその体裁を整えていなかったドイツのほうがはるかに参考になると思われたのである。使節団の報告書「米欧回覧実記」が米英両国に各 20 巻を費やしているのは別として、フランスの 9 巻に対してドイツは 10 巻であることを見てもそれはわかる。フランスでは普仏戦争とパリ・コミュン・の傷の影響がまだ大きかった。「米欧回覧実記」は共和制下のフランスについて、「仏国ニ党論多ク、…非議スルモノ少カラス、実ニ仏国ノ艱難ナル厄運ニ際シタリ」<sup>72</sup>と感じている。そしてむしろ過去のナポレオン三世治下の 22 年間国が栄え、国民にも仰ぎ慕われたとして好意を表明している。「米欧回覧実記」はドイツの部分、ことにベルリンにおいて筆致はにわかに詳細になり、精彩を帯びるのである。

使節団一行が鉄道でドイツに入ったのは明治 6 年 (1873) 3 月 7 日である。ドイツ帝国はそのわずか 2 年ほど前の 1871 年 1 月 18 日に成立したばかりである。江戸幕府の日本から新体制に至ったばかりの国の使節団がドイツに大きな関心を抱いたのは当然であろう。「米欧回覧実記」は国内が数十の国に分れていた状態から、プロイセンがドイツを統一するに至る経緯が大きな共感をこめて述べられている。また宰相ビスマルクが招宴で外交について述べたことはそのまま引用されている。「予ノ幼児ニ於テ、我普国ノ貧弱ナリシハ、諸公モ知所ナルヘシ…大国ノ利ヲ争フヤ、己ニ利アレハ、公報ヲ執ヘテ動カサス、若シ不利ナレハ、翻スニ兵威ヲ以テス、固リ常守アルナシ、小国ハ…殆ト自主スル能ハサルニ至ルコト、毎ニ之アリ、是ヲ以テ慷慨シ、…愛国心ヲ奮励スル、数十年ヲ積テ、遂ニ近年ニ至リ、纔ニ其望ミオ達シタルモ…」<sup>73</sup> ビスマルクのスピーチは「貧弱」だったプロイセン王国が、大国のオーストリアとフランスとの戦争に勝利して「大国」になったと言うに等しい。フランスの 9 巻に対して 10 巻が費やされている大きな理由である。伊藤博文は「ビスマルクのスピーチに感奮して、ひそかに『東洋のビスマルク』を目指そうと考えた。」<sup>74</sup> という。伊藤博文が自己をビスマルクに措定しようとしたのであれば、伊藤が明治天皇をヴィルヘルム一世に措定したとしても不思議はないであろう。そして日本はドイツを目指すべきことになる。

首都ベルリンで一行になによりも大きな印象を与えたのは、皇帝の「視覚化」であり、それに伴うかのように思われた君主に対する崇拜の感情であったように見える。ベルリンの本宮殿におもむけば文武百官を教会堂に集めて礼拝式が行われ、宮殿に至るウンター・デン・リンデン通りにはフリードリッヒ大王の騎馬像がそびえている。この高さ 13・5 メートルの騎馬像は 1851 年 5 月に大王即位 111 年を記念して序幕されたもので、台座部分には同時代のプロイセン

72 久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」三 (岩波文庫), 2003, p.65

73 「米欧回覧実記」三 (岩波文庫), p.329 以下

74 「現代語訳 特命全権大使米欧回覧実記」(水澤周訳注)(慶応義塾大学出版会) 2005, p.385 (「附録」)



の将軍や文人（レッシング、カント）の 60 名の像とともに大王の生涯を示すレリーフがあった。大王の業績が自ずと目に入るようになっているのである。「米欧回覧実記」にはこの騎馬像のほかに、ポツダムの離宮サン・スーシにあった立像が掲載されている。「米欧回覧実記」において君主の銅像が大きく描かれているのはベルリンしかない。3 月 22 日ヴィルヘルム皇帝の誕生日を祝うベルリン市内の様子は華やかなものだった。「此ノ日ハ、皇帝ノ天長節ニテ、帝宮ニ於テ、宴ヲ賜ハリ、府中ミナ旗ヲ揚ケ、夜ハ各店頭ニ、瓦斯ノ火ヲ以テ、花紋文字ヲ画キ出シ、或ハ各彩ノ火烟ヲ焼キテ、街頭ニ嵩呼万歳ヲ唱へ、四街ノ焼燈、真ニ白日ノ如クナリキ」<sup>75</sup> ヴィルヘルム皇帝が宮殿の窓辺に姿を見せると群衆から万歳の声が起こり、誕生日には市中において万歳の声が高く上がる。使節団一行はこの様子を深く印象づけられたのである。皇太子フリードリッヒ（のちのフリードリッヒ三世；1831-1888）が病氣から回復してベルリンに戻った時も奉祝の気分が首都にあふれた。「市街ミナ旗ヲ挙テ祝ス、此夜学校ノ教師生徒、皆是ヲ祝スルカ為メ、教師官属ハ、車馬ニ服シ、生徒ハ松明ヲ手ニシ、列ヲナシテ『フランデンフェルゲルトール』通ヲ歩シ、太子ノ宮ニ至リ、鼓樂シテ祝声ヲ揚ク、満街甚タ闊カナリキ」<sup>76</sup> また漁業会社の展覧会開会式に招かれて行くと、群集がおびただしく集り、そこに平服の皇帝や皇族が入ってきた。人払いするわけでもなく、随員 3, 4 名をいう簡素さである。人びとは両側によって道をあけて、敬礼をした。「君民交和シテ相親ムノ状、殊ニ感悦スヘシ」<sup>77</sup> 日本では想像できないことだった。また王宮広場では全体の高さが 61 メートルに及ぶ勝利の塔（Siegessäule）の完成がまじかだったはずである。近年の三つの戦役を記念したこの塔の工事は 1864 年に開始され、1873 年 9 月 2 日に竣工した。塔の頂上には勝利の女神ヴィクトリアのブロンズ像がすえられたが、それはプロイセンを象徴する女性ボルシア（Borussia）になぞらえられていた。使節団の目にはこの塔も皇帝の視覚化につらなるものとして映ったであろう。

ベルリンの皇帝崇敬の気風は日本人留学生にも影響が及んでいた。一行が 3 月 9 日ベルリン駅に到着すると出迎えの日本人が多かった。「木戸日記」には明治 6 年 3 月 9 日として「鮫島辨務使、青木・品川其外留学生数十人ステーションに来る」<sup>78</sup> とあるという。ホテルにも数十人来訪というから、ベルリン在住の日本人の関心は高かったのである。このような歓迎ぶりには理由があった。その日の「米欧回覧実記」はこうである。「七時ニ伯林ノ駅ニ達スレハ、在府ノ辨務使、書記官、及ヒ在留学生マテ、ミナ駅ニ出迎フ、日耳曼国人ハ、帝王ヲ尊敬シ、政府ヲ推奉スルコト、甚タ篤シ、故ニ本国使節ノ来ヲキ、留学生書生ヘハ、其教師ヨリモ、故ニ休暇ヲアタヘテ、其公使館ニ伺候セシメ、在鄙ノモノモ、遠ク此府ニ集来シ、或ハ是ヲ怠リ、我学事ニ関係ナシトイフモノハ、反テ道ヲ知ラスト論斥スルニ至ルトナリ、英米ニテハ、反テ書生輩ノ此

75 「米欧回覧実記」三（岩波文庫）p.348

76 「米欧回覧実記」三（岩波文庫）p.319

77 「米欧回覧実記」三（岩波文庫）p.352

78 「米欧回覧実記」三（岩波文庫）p.386 以下（校注）

等ノ送迎ヲ勉ムルヲ笑フ、毎国ノ人気、其異カノ如シ」<sup>79</sup> 英米ではこのような歓迎ぶりは揶揄の対象であるが、ドイツではまったく違った。当時は留学生派遣が盛んだったから、ロンドンにもパリにも日本人は多かったはずである。しかし出迎えについて言及はまったくない。一行にとってドイツ人の態度は模範とすべきものとして映った。ドイツ人の態度はなによりも「帝王ヲ尊敬」することに発すると思われたからである。そしてそれは「視覚化」の効果と思われた。日本はその点において不足していた。大久保利通は 3 月 29 日ベルリンから汽車でフランクフルト・アム・マインに向い、そのまま帰国する。留守政府における「薩長閥と佐賀閥の対立が激しくなったため…要請」<sup>80</sup> されたことが理由とはいへ、まるで見るべきものは見たとでもいうかのようである。同様に帰国を求められながら帰国しなかった木戸とは対照的である。

六大巡幸の最初は明治 5 年（1872）の大阪並びに中国・西国巡幸である。5 月 23 日（旧暦）御召艦で品川沖から出発した。参議西郷隆盛、陸軍少輔西郷従道以下 70 余人と近衛兵一小隊が供奉するだけのこじんまりとした陣容である。鳥羽から山田には騎馬で進んだ。「沿道奉迎の庶民、服御の舊制に異なると鹵簿の簡易なるとに驚かざるはなく、路傍に坐して拍手拜禮す」（「明治天皇紀」第二，p.693）京都はともかくとして、下関でも歓迎があった。「遐邇の民鹵簿を拜せんとし海陸に充塞し、歡呼の聲湧くが如く、市中至る所軒燈を掲げて奉迎の意を表す」（「明治天皇紀」第二，p.705）ところが九州に到ると事情は別だった。長崎では文部省直轄の広運館と医学校二校に臨幸する予定だった。ところが夏休みということで生徒が不在だったのである。そのために臨幸は中止となった。西郷隆盛は文部省直轄校であるのに「聖駕奉迎せずして休業せる兩校」（「明治天皇紀」第二，p.711）の措置を怒り、当事者が進退伺いを出す騒ぎになった。また熊本から鹿児島に向かう時、出航するまで 4 時間も潮待ちをしなければならなかった。この時も西郷隆盛は供奉の海軍少輔川村純義を叱責した。干満測定を誤ったというのである。「激怒」（「明治天皇紀」第二，p.715）した西郷は天皇の面前で傍らの西瓜を庭に投げつけて粉碎してしまった。九州におけるこのような事件が教えてくれるように、地方では天皇は政治的な権威としてはまだまだ十分には浸透していなかったのである。「近代天皇制国家」の確立はまだまだのことだった。ところがベルリンでは「帝王ヲ尊敬シ、政府ヲ推挙スルコト、甚篤シ」というドイツ国民の気風が日本人留学生にまで及んでいて、わざわざ遠くから来た者もいたのである。

## 5

巡幸の規模が大幅に拡大されるのは、六大巡幸の 2 番目、岩倉使節団帰国後の奥羽巡幸からである。明治 9 年（1876 年）6 月 2 日に赤坂の仮皇居を發し、草加から北上して福島、仙台、盛岡、青森、函館に至り、7 月 19 日函館から明治丸で横浜に帰った巡幸である。右大臣岩倉具視、

79 「米欧回覧実記」三（岩波文庫）p.301

80 「現代語訳米欧回覧実記」第 3 巻，p.409（訳者注）

内閣顧問木戸孝允、大史土方久元、宮内卿徳大寺実則などが供奉して、総勢 230 余人である。（ただし岩倉具視と木戸孝允は全行程に同行するのではなく、随意の同行だった。また参議大隈重信は病の故をもて供奉を辞退していた。）海路ではなく陸路である。「天皇の視覚化」が本格的に始まったのである。明治 11 年 8 月 30 日出発の北陸・東海兩道巡幸は右大臣岩倉具視、参議大隈重信、井上馨、陸軍少輔大山巖、宮内卿徳大寺実則などが供奉して総数 300 余人、これに大警視川路利良以下警部・巡查等 400 人が加わった。西南戦争は前年のことであり、大久保利通は明治 11 年 5 月 14 日暗殺されたばかりという政治情勢が反映していて、あたかも威力偵察の体がある。実際一行が直江津を過ぎるころには供奉の参議暗殺の風説がたち、鹵簿の警護体制に変化があった。それでも「天皇の視覚化」を進める必要があったのである。明治 13 年の山梨三重両県京都府巡幸は貞愛親王及び太政大臣三条実美、参議山田顕義、文部卿河野利鎌、内務小輔品川弥二郎、陸軍中将三浦梧樓、宮内卿徳大寺実則以下約 360 人である。そして明治 14 年の山形秋田両県・北海道巡幸は当初約 420 人で計画された。非常な大人数といってよいだろう。ただ実際には宿泊所の問題から六分の一減となって約 350 人となった。左大臣有栖川宮熾仁親王、陸軍歩兵中佐北白川宮能久親王以下が供奉した。戊辰戦争における東征軍大総督と奥羽越列藩同盟によって輪王寺宮として旗頭に担がれた人物という組み合わせは政治的というしかない。「天皇の視覚化」にこれほど効果があることはなかったであろう。六大巡幸の最後である明治 18 年の岡山・広島・山口三県巡幸は総勢 199 名と少ない。陸路ではなく横浜から海路を進んだ。しかも御召艦は艦船ではなく、横浜丸だった。このことから明治 14 年の奥羽・北海道巡幸が六大巡幸の頂点をなしていたことがわかる。

「天皇の巡幸にはヨーロッパの君主たちのように華やかな装飾や劇的要素はほとんど存在しないが、それでもなお各地をゆく天皇の姿は直接目視した民衆のみならず、錦絵などの当時のメディアを通じて広く流布し、威力の誇示という点では十分な機能を果たし得たのである。」<sup>81</sup> 「華やかな装飾」については明治 9 年の奥羽巡幸に関して「行幸の権威づけには、睦仁の乗る高級馬車や色鮮やかな天皇旗、それらを護衛する金モールを飾ったきらびやかな軍服を着た近衛騎兵などが用いられた。」<sup>82</sup> という説もある。「華やかさ」の基準の問題にすぎないわけであるが、鳳輦について「意外に質素」<sup>83</sup> という感想も持ったものがいたことは事実である。

「明治維新後八年半ほど経ったこの段階になると、政府の作ってきた『大元帥』イメージを中核とした新しい天皇像が、天皇が足を踏み入れたことのない奥羽地方にまで、言説や絵画の形で広がっていたといえる。」<sup>84</sup> しかし「大元帥」イメージというような天皇イメージが奥羽地方にまで広がっていたということには疑問がある。「大元帥」のイメージとは「威力の誇示」につ

81 山本、前掲書、p.5

82 伊藤之雄「明治天皇一むら雲を吹く秋風にはれそめて―」ミネルヴァ書房、2006、p.194

83 渡辺宏「六稜の青春―山形師範学校物語―」中央企画、1972、p.34

84 伊藤、前掲書、p.193

ながる。明治国家において「天皇の掌握する権力はすこぶる強大であった」<sup>85</sup> という説は否定しがたい。しかし明治 14 年頃にあつてはまだそういう段階ではなかったように思われる。東北はまだ巡幸による「説得・懐柔」<sup>86</sup> の工作を必要としていたのである。

明治 14 年の山形秋田両県並びに北海道巡幸は政治的な危機の予兆をはらみながら開始された。巡幸出発日の 7 月 30 日に天皇によって聴納された北海道開拓使官有物払い下げの申請が、途中大きな政治問題化した。巡幸には参議開拓長官黒田清隆と参議大隈重信が供奉していたが、黒田は申請の当事者であり、大隈は払い下げの批判派である。巡幸の間に東京では大隈退放の計画が進められていた。大隈は 10 月 11 日深夜に辞官を了承するが、それは東京巡幸の日である。この間の天皇の態度には注目すべきものがある。天皇は大隈排斥をなかなか了承しようとしなかった。天皇は「大隅の失策」（「明治天皇紀」第五，p.544）なるものの証拠の提示を求め、辞職は強制すべきでなく、大隈に充分納得させるべきであるとした。また大隈が免官されるならば、黒田はたとえ払い下げが廃止されても異議ははさまないであろうという上奏に対して、ふたつは別の問題であると鋭く切り返して大臣を恐懼させた。開拓官有物払い下げ問題について「天皇、新聞紙に由りて、…世論をば知りたまふ」（「明治天皇紀」第五，p.538）という状況だった。しかし事情を感じてからの「推察」（「明治天皇紀」第五，p.539）には非凡なものがある。ここに天皇の人格の成長という巡幸の効果を認めることは可能である。「結局睦仁は、巡幸から帰還した当日の十月十一日、大隈を除いた大臣・参議の意向にもとづいた上奏を裁可し、憲法制定と国会開設、大隈に辞任を勧告することが決定した。その夜、大隈は辞任を了承した。…明治十四年の政変という大きな政治変動においても、睦仁は、巡幸中ということもあって情報すらほとんど与えられず、伊藤を中心とした内閣の意向を承認する程度の関わりしか持てなかったのである。」<sup>87</sup> 新聞で情報を知るような天皇に十分な政治的な力があったとはいえない。「威力」は不足し、「近代天皇制国家」の確立はまだまだであった。

このような事情は明治 8 年くらいになると東北にまでひろがったという「大元帥」イメージにはあわない気がする。ヨーロッパ、わけでもプロイセンやドイツ帝国にならったかに見える「天皇の視覚化」政策に対して、民衆は政府の思惑を超え、政治とは無縁のところでは反応したのである。「近代天皇制国家」における天皇の「威力の誇示」とは別の前近代的な次元で反応した。

酒田の行在所を舞台にして展開された「衆」（「明治天皇紀」）、「男女老若」（行在所館主談話）の前近代的な行動の意味するものは、天皇の「大元帥」イメージや「威力の誇示」という政治的とは別の次元の行動と言うよりないものだった。「無病と安産」がもたらされると信じ、「一生無病」「産ガ軽シ」と有難がる。それは余目駅端において稲刈りをする農民の顔に浮かぶ祝祭的な気分に通じる。最上川における網漁天覧の際の「いるわ いるわ とれるわ とれるわ」と

85 水林彪「天皇制史論―本質・起源・展開」岩波書店、2006、p.303

86 河西、前掲書、p.20

87 伊藤、前掲書、p.236 以下

いう漁師達の高揚した気分も同じある。あらかじめ準備された魚であることは問題にならない。天皇の面前で大漁になるということが重要だった。それによって大漁が招福されるであろう。そこには山形県各地にも伝わる田植え踊りに共通するものがあると感じられる。田植え踊りは「農耕の春の鍬入れから秋の刈り入れまでの労働の動作を、模倣的に演ずるもので…、その基本には稲が順調に豊作になるようにという呪術的な信仰があった。」<sup>88</sup> 鶴岡から酒田に向かう途中行幸の列は京田川を渡った。そのとき家紋の入った小旗をかかげ、米俵を満載した数十艘の舟が酒田方面に下っていった。京田川から最上川に入った船団は酒田の行在所からも望まれた。それは豊年の演出であり、そこには豊穰を願うあるいは豊穰を祝う祝祭的気分が存在したはずである。同じことは明治 9 年の奥羽巡幸のときもあった。栗橋の行在所で利根川の漁労の様子が天覧に供された時のことである。「中流捕鯉の観を設けて天覧に供するあり、漁夫数人白衣を著して水中に潜没し、争ひて鯉魚を抱きて浮かぶ、其の數總て四十八尾」「争ひて」とは威勢の誇示である。天皇は威勢を鼓舞し、豊漁をもたらしてくれる存在であった。それは「近代天皇制国家の国づくり」という「近代」とはほとんど無縁のものに思われる。「地域産業の奨励」とも趣旨が違ふであろう。

「明治天皇紀」の記述で目につくのは天皇にむかって拍手を打つ人びとである。それは六大巡幸の最初から見られた現象である。お賽銭をなげる者もいた。神社にお参りするとき、その神社に祀られている祭神を意識しない人も少なくはないだろう。明治 9 年の巡幸の時役人にうながされなければ鳳輦を拝まなかった宮城県農婦は、しかし自分の在所の神社では自分からお参りをして、拝むことがあったはずである。その神社に祀られている神様は願いを聞き届けてくれるであろう。武光誠によれば日本国内には約 12 万の神社がある。そこに「まつられている神様は、母親のような暖かい目で人びとを見守り、願いをかなえてくれるといわれる。」<sup>89</sup> それは宮田登いうところの〈天皇制の相対化〉につながるように思われる。「庶民にとって『雲の上』という王家のイメージは、恐らく征服王として君臨し、やがて司祭王の機能を維持する段階で、スメラミコトの表現の通り、古代社会から培われたものだろう。しかしそれとても庶民にとっては、都の周辺を離れば、それぞれの地域社会では、長者の家筋が、聖なる神主として精神生活を支配し、江戸時代には、『お城下』が都に相当して、藩主・領主がいた。かれらもまた『畏れ多い』貴種であり、中世以降、都の天皇家の影は薄かった。一方、人並み以上であれば、すぐにカミに祀ることを好む国民性があり、庶民にとっての『現人神』の表現はそれほど大袈裟にはならない。『畏れ多い』と感じられる貴種は古い家筋に属すれば、自然とそうなのであり、唯一絶対の天皇にのみ収斂されるべきではなかった。天皇制を常に相対化できる原理を、観念ではなく庶民の実感として把握することに努めたいと考えている。」<sup>90</sup> これについて明治 14 年

88 安彦好重「出羽の民俗芸能」みちのく書房、1997、p.183

89 武光誠「知っておきたい日本の神様」（角川ソフィア文庫）平成 17、p.11

90 宮田登「王権と日和見」（『宮田登日本を語る』10）吉川弘文館、2006、p.107 以下



の山形県巡幸の関係者の証言は興味深い。六大巡幸では各地の学校に臨幸がなされ、生徒の模範発表がなされるのが通例だった。山形では山形師範学校に臨幸があった。その時理科の実験を天覧に供した生徒佐々木忠蔵の回想である。「その日、私は今の旅籠町栄玉堂の向かい角でお迎えすべく学友四、五名と鳳輦を待ち受けておりました。この日は朝来天気陰うつ、時々小雨が降っておるにもかかわらず、遠近の土民は絡繹として路の両側に来集し、いずれも静粛にしておる様は、とても現今においては見る事ができない光景です。それもそのはずです。この時代は封建制がまだ強く、殿様のお通りでさえ、庶民は幕の内ですすめるのではなく、聴くのであった時代、公方様の時などは、何人も門をとぎしていなければならない時代。これよりわずか十余年後の時代であったのですから、だれでも街道で竜顔を拝し得らるることを、むしろ不思議と感じ、もったいないと感じたのです。むろん当時は“万歳”なども唱えなかったのです。実際私どもでも天皇陛下を現つ神と思っていたのですから、いよいよ鳳輦が私どもの前をお通り遊ばさる時には、雨後の道路は泥濘であったにもかかわらず、いずれも土下座して平伏して礼拝申しあげたので、私が頭をあげたときには、鳳輦はすでに前方にお進み遊ばされたので、竜姿を拝し奉ることができませんでした。それは恐らくだれでもそうであったと想像します。」<sup>91</sup>「竜顔」という言葉はあるが、天皇はいうならば江戸時代の「殿様」と同格的にとらえられていたことがうかがわれる回想である。しかし大行列の「殿様」に対し拍手を打つ者はいなかったのではないだろうか。恐れ入る者はいたであろうが。

明治 14 年の巡幸にまつわって酒田で生じた現象は、すでに明治 5 年の西国巡幸の際鹿児島でも起こっていた。天皇が行在所を去った後のことである。「御發艦後、衆庶に行在所の拜觀を許すや、天明を俟たずして群民參集し、神代三陵御遙拜に供せし薦、御涼櫓裝飾の杉の葉等を拜戴して之れを災異祓禳の神符と爲せりと云ふ、是の類、他の地方にも往々行はれしを傳聞す、群黎が皇室尊崇の念の熾なる一斑を知るに足るべし」（「明治天皇紀」第二、p.726）しかしそれはキーンがいうように「国民の皇室尊崇の念を例証するものと解釈された。」<sup>92</sup> ととるべきことなのかは考慮の余地がある。明治天皇は明治 5 年 6 月 22 日に鹿児島の行在所（旧鹿児島城内鎮西鎮台分営）に入り、翌日午前 7 時行在所の庭に仮設された御拜所で神代三陵を遙拜した。神代三山陵ともいい、鹿児島県内に点在している。神武天皇の父君・母君を祀る吾平山上陵は別として、可愛山陵には農業の神徳が想定され、高屋山陵はいわゆる山幸彦を祀る。神話的に考えるならば豊穣に結びつく。人びとが「参集」したのは「皇室尊崇の念」もあったかもしれないが、より強くは天皇に結びついていると想定されたなにかに対する念からではないか。それは「神明」といえるものではないか。明治 5 年であれ、明治 9 年、あるいは明治 14 年の行幸であれ、天皇は政府が意図した政治的な天皇としてではなく、豊穣をもたらす、「願いをかなえて

91 渡辺、前掲書、p.33 以下（「明治天皇行幸五十周年記念講演会における講演速記」昭和 6 年）

92 キーン、前掲書、p.352（注）

くれる」存在として、いうならば前近代的な、呪術的な受けとめ方がされたのではないだろうか。

この意味で注目すべき出来事が明治 9 年の奥羽巡幸の際に青森県で起こった。7 月 13 日に七戸から野辺地に向う途中の出来事である。「沿道の人民地上に跪きて聖駕を拜する者多く、輦路を距る一里の村邑に於てすら、尚路頭の雑草を除き屋内を酒掃して遥拜せりと云ふ、又是の月奥地の氣候梅霖に似て、恰も歉歳に於けるが如き兆あるを以て、農民皆凶作を豫想して愁色ありき、然るに聖駕青森縣下に入りたまふ日よりして、連日晴天氣温亦昇れり、是に於て衆始めて眉を開き、天子様世の中を持つて御座つたと歡呼して盛儀を拜觀せりと云ふ」(「明治天皇紀」第三, p.667)「酒掃」については分明でないが、農民は天皇が「世の中」すなわち豊作を持てきてくれたと非常に喜びかたをしたのである。赤坂憲雄の示唆に富む説によれば「明治以前のわたしたちの歴史のなかで、民衆が天皇をミカドでも天子サマでもダイリでもなく、『天皇』とよんだ時代ははたして存在したのだろうか。『天皇』という言葉がいまだに漂わせる呪的な雰囲気をおもえば、わたしたちにとっての天皇が『天皇(テンノウ)』であることの自明性を、ひと度は疑い、留保してみることが必要であるのかもしれない。」<sup>93</sup> という。天皇という語形は元老院によって明治 9 年から明治 13 年にかけてつくられた憲法草案(「日本国憲按」)の最終第三案で初めて皇帝に代わって浮上した呼称であるというのだ。事実明治 2 年 2 月「人民の不満が強かった奥羽地方に、天皇の權威を知らしめるために出した『奥羽人民告諭』<sup>94</sup>には「天子様ハ天照皇太神宮様の御子孫様にて此世の始より日本の主にましまし」<sup>95</sup>とある。庄内・五丁野の漁労に関連して「大衆」が「天子様」の仕事は「朝日様をお迎えする」ことだけと考えたのはもっともだったことになる。赤坂によれば養老令の儀制令の冒頭においては天子、天皇、皇帝、陛下など、さまざまな呼称の使い分けが規定されている。「天子。祭祀に称する所。天皇。詔書に称する所」<sup>96</sup>という。晴天をもたらした天皇を青森県の農民が「天子様」と言って歓喜したのはむしろ当然だったことになる。明治 14 年の庄内巡幸の際に最上川で〈大漁〉となったのは、「演出」の結果ではなかった。まさしく「天子さま」がもたらしたのであって、「天皇」ではなかったのである。夏目漱石「坊つちやん」(明治 39 年)に古賀先生(うらなり)に対するマドンナの振る舞いに関して下宿の婆さんがいう言葉が面白い。婆さんは「それちや今日様へ濟むまいがなもし、あなた」(「七」)と慷慨するのである。「今日様(こんにちさま)」とは「今日を守る神で、天道様とも日輪様とも言う。」<sup>97</sup>「坊つちやん」の婆さんの言葉は青森県の農民や山形県最上川の漁師の考え方に通ずるものがある。

93 赤坂憲雄「王と天皇」(ちくま学芸文庫)1993, p.187

94 草柳大蔵: 明治天皇村に行く(「NHK 歴史への招待」8, 日本放送協会, 昭和 55, p.16

95 草柳, 上掲書, p.16

96 赤坂, 前掲書, p.178

97 「漱石全集」第二巻(短編小説集)岩波書店, 昭和 51, p.917(注解)

ドイツにおいて民衆が皇帝に万歳を叫び、「君民交和シテ相親ム」のは、特命全権大使一行が考えたように、「帝王ヲ尊敬」する念からのみ起こった行動ではなかった。ヴィルヘルム一世は〈勝利王〉なのである。そこにはフリードリッヒ大王になぞらえられるような事蹟があった。ベルツはヴィルヘルム一世と明治天皇を分けて考えている。明治天皇はゲルマニアやブリタニアに近い、と。ゲルマニアは戦いの女神としてドイツのナショナリズムあるいは統一の象徴的存在で、銅像や絵画では剣を持つ姿になる。クライストの詩「ゲルマニアが我が子供たちに寄せて („Germania an ihre Kinder“)」でもゲルマニアは戦いの女神である。フランスに対する復讐を煽り、戦いを呼びかける詩だからそれも当然である。しかし仔細に見るとこの女神はドイツ人を「母親のような腕で抱きしめ、胸のなかで保護する」<sup>98</sup>のである。画家オーヴァーベック (Friedrich Overbeck; 1789-1869) の絵「イタリアとゲルマニア (Italia und Germania)」(1828) には剣は描かれていない。ふたりの乙女イタリアとゲルマニアが仲良く寄り添っている。ゲルマニアは戦いの女神ながら国民を守護する女神でもある。ベルツのいうゲルマニアはむしろこのイメージではないだろうか。実際フリードリッヒ大王も後世において一度ならず国の危機を救う救世主としてとらえられていたのである。ナポレオンの前に屈服し、恥辱にまみれたプロイセンの最後のよりどころはフリードリッヒ大王だった。トライチュケによれば「大王の姿が雲間から降臨し、国民に『起て、わがプロイセン、わが旗の下に起て、汝らは先祖より偉大であれ』」<sup>99</sup>と呼びかける詩ほど効果があったものはなかったという。そのイメージはむしろゲルマニア風といえる。

ベルツが天皇に「単なる人格」ではなく、「ある観念の人格化」を感じたのは洞察として評価できよう。青森県の農民や山形県余目村駅端の農民を含め、民衆は天皇に「単なる人格」ではなく、養老令の「祭祀」につながるような「天子」を見たからである。そのように考えるならば鹿児島県や山形県において民衆が行在所に押しかけたことは不思議なものではなくなる。民衆は行幸に対して大久保利通などが政治的な意図をこめてもくろんだこととは別に、前近代的に反応した。明治国家がもくろんだ近代国家像や天皇像との乖離である。王には「普通の人間と違う呪力の獲得」<sup>100</sup>が必要である。青森県の農民は天皇にそれを見た。フランスやイギリスの国王の瘰癧治療の能力はよく知られている。「疑いもなく、中世のイギリスやフランスには〈王〉の奇蹟と神秘の力にたいする信仰が、たとえ瘰癧の治療というきわめて限定された場面ではあれ存在したのである。十九世紀になっても、フランスには〈王〉が治癒力をもつと確信している信者は多く、フランス革命で中断された奇蹟の復活を求めたといわれる。」<sup>101</sup> 19 世紀どころか、

98 Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe, Carl Hanser Verlag, 1982, Bd.1, S.26

99 Heinrich von Treitschke: Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert, Erster Teil, Athenäum/Droste Taschenbücher Geschichte, 1981, S.86 (この詩は Theodor Körner のものかもしれないが、今のところ不明である)

100 山折哲雄「神と王権のコスモロジー」吉川弘文館、平成 5、p.23

101 赤坂、前掲書、p.67

20 世紀になってもそういう信仰は健在だった。フランスではド・ゴール大統領(1890-1970；大統領在任 1958-1969) がなくなって一年もたたないうちから墓に年間百万人もの「大量の巡礼者が参詣」<sup>102</sup> するようになり、「政治的なパワーと宗教的な聖性の結合」が生じた。フランスの人びとは病氣快癒を祈願して祈り、絵馬を捧げたという。

ドイツ人には特にこの傾向が強いといえる。トーマス・マンは「ドイツとドイツ人 (Deutschland und die Deutschen)」(1955) においてドイツ・ロマン派の本質について「自分自身が、地底の世界に通じるような非合理で悪霊的な生命力に近いところに、すなわち人間の生命の源泉の近くにいて感じており、他方単に理性的でしかない世界観や世界論に対しては、自分はまだもっと深い理解を持ち、聖なるものともっと深い結び付きを持っているとして反逆する、そのような魂の古代性」<sup>103</sup> と考えている。原文の „dämonisch“ を「悪霊的」とするのはいささか違和感をおぼえるが、ナチス・ドイツを分析する敗戦直後のアメリカにおける講演であることを考えるならば仕方ないことかもしれない。この講演を含むエッセイ集の原題は「ドイツについての心配 (Sorge um Deutschland)」(1957) なのである。ドイツの歴史においてはここでいわれている「聖なるもの」との「結び付き」や「魂の古代性」にかかわるような現象は珍しいことではなかったのである。フリードリッヒ大王 (Friedrich II. 1712-1786；在位 1740-1786) の父王であるフリードリッヒ・ヴィルヘルム一世 (1688-1740；在位 1713-1740) は〈兵隊王〉という別称があった。軍服姿で人前に姿を現したヨーロッパ最初の君主である。儉約などで国の財政力を充実させ、兵力を倍増したが、ひとつ浪費とも思われる政策があった。〈のっぽ連 (die langen Kerle)〉と呼ばれた巨人近衛連隊の創設である。王は身長 188 センチ以上の兵士 600 名の部隊をポツダムの王宮前広場を行進させるのが常だった。出身は国内であることを問わなかったし、ロシアのピョートル大帝が 200 名ばかり献呈したこともあった。火縄銃操作には長身の兵が有効であるという実用性も考えられるが、しかしこの部隊は戦場に立つことはなかったのである。その事実がかえってその象徴性を暗示している。行進の地響きはポツダムの空に響いたはずである。国民の評判は悪かったが、国王には〈巨人〉について何らかの呪力を期待するところがあったのではないだろうか。このような教練は 16 世紀末にオランダのマウリッツ公が考案したものだという。規律正しい行進など一連の厳格な軍事教練は部隊に格段の強さを与え、その威力は大きかった。それは構成員の間に「原始的でひじょうに強力な社会的紐帯が、自然と湧き出すように形成」<sup>104</sup> させたというのだ。「原始的」という言葉は呪力にもつながるであろう。グリムが「ドイツ伝説集 (Deutsche Sagen)」で伝える話に、カルル大帝の家臣アインヘーアのことがある。「18. 巨人 アインヘーア (Riese Einheer)」である。シュヴァーベン生まれのアインヘーアは巨人だった。河川を歩いて渡るのに橋は必要がなく、馬はしっぽをぐ

102 山折、前掲書、p.42

103 トーマス・マン (青木順三訳)「講演集ドイツとドイツ人」(岩波文庫) p.30

104 ウィリアム・H・マクニール (高橋均訳)「戦争の世界史 技術と軍隊と社会」刀水書房、2002、p.177

いと引っ張れば渡ることができた。「彼はカルル大帝のもとフン族やヴェント族と戦った。草を刈るように兵をなぎ倒し、兎か狐みたいに槍の穂先にかけてかついだ。…戦場ではひとつの軍団分の働きをした。ヴェントもフンもこの巨人を見ると逃げ出した。」<sup>105</sup> アインヘーアとは Einheer, すなわち「ひとつ (ein)」の「軍隊 (Heer)」である。それくらいの大男だったのである。また同じ「ドイツ伝説集」には地下の金や銀などを掘っているらしい大男の伝説がある。「3. ハルツの山法師 (Der Bergmönch im Harz)」である。ふたりの鉱夫が坑道で作業していると油が切れて暗くなってしまった。困っているところに奥から巨大なカンテラを手にした「恐ろしげな大男」<sup>106</sup> が現れた。大男は怖がらなくともよいと言いながら油をくれた。そして鉱夫の鶴嘴をとると二人の一週間分の仕事を 1 時間でやった。巨人が「俺に会ったことは内緒だぞ」と言いながら壁をたたくと、壁が開き、金と銀が輝く坑道が見えた。あまりのまぶしさに目をそらし、もう一度目をむけたらもうすべては消えてしまっていた。目をそらす前に鶴嘴を投げ込んでおけばよかったのに、というのがグリムの説明である。鉱夫はこの出来事を人に話してしまったため、以後は自分で油を補給しなくてはならなかった。ドイツ中世の歌謡「ニーベルンゲンの歌 (Das Nibelungenlied)」において宝の所有者ニーベルンゲンは「味方として十二人の勇士を擁し、いずれも／脅力すぐれた巨人だった」<sup>107</sup> とされる。彼らは不死身とされたジークフリートの敵ではなかったわけだが、いずれにしろ宝と巨人の深いつながりが見られる。王はそのような巨人を支配する存在である。日本における相撲の起源も違いはないであろう。明治天皇が相撲好きだったことも意味深いものになる。巡幸においても山形県を含めて幾度か相撲が天覧に供されている。ド・ゴール大統領が非常な長身であったことも死後の現象になにか作用したかもしれない。また山形県清川の行在所に入る前、立谷沢川において砂金採取の模様が天覧に供されたが、それにはこの意味で象徴的な意味がこめられていたのかもしれない。

フリードリヒ大王は父王をついで兵力を増大し、多く戦争をした。オーストリア継承戦争に勝ってシュレジアを割譲させることができたが、その後の七年戦争では国内どころか、オーストリアもフランスもロシアも敵に回してしまった。周囲すべて敵という危機的状況である。戦いでは勝ったり負けたりというのが実際であった。しかし「1945 年までドイツの学校では七年戦争を連戦連勝と教えられた。」<sup>108</sup> 伝記では苦戦や敗戦についてはあまり言及せず、ロスバッハの戦い (1757) のような一種奇跡的な勝利を喧伝する。ロスバッハの戦いとは 6 万 2 千の仏墺連合軍を 2 万 2 千で破った戦いである。後世における危機における大王頼みといえる現象はこのような勝利に多く由来する。その他即位してすぐく自分が捕虜になっても、国家のために

105 Brüder Grimm „Deutsche Sagen“ (Editiert und kommentiert von Heinz Rölleke) Deutscher Klassiker Verlag, 1994, S.53

106 Grimm, a.a.O.S.38f.

107 「ニーベルンゲンの歌」(相良守峯訳) 前編 (岩波文庫), p.91

108 飯塚信雄「フリードリヒ大王」(中公新書) 1993, p.135



躊躇なく自分を殺せ」と命じたとか、質素とされた生活ぶりや啓蒙的な政策など、大王神話が形成されたのである。大王は「視察の旅を怠らなかった」<sup>109</sup> が、特にじゃがいも栽培に力を入れて視察した。1886 年には画家ヴァルトミュラー (Robert Warthmüller; 1859-1895) によって「王様はどこにでも (Der König überall)」という絵画が描かれた。ジャガイモを収穫している農民一家を視察する大王の絵である。農民は土から掘り起こしたばかりのジャガイモを大王に差し出している。(これは東幸において「稲穂」が天覧に供された行為に同一である。)[1771 年から 72 年にかけての大飢饉のあと、何人かの啓蒙的な君主、なかでもプロイセンのフリードリッヒ大王はジャガイモ栽培を辛抱強く推奨した。]<sup>110</sup> 花を鑑賞するものでしかなかったジャガイモは食料としておいに有効だったのである。大王は領土のみか、現実に豊穰をもたらした。「どこにでも (überall)」という形容は意味深く、象徴的である。大王は神の如く遍在する存在に昇華しているのである。プロイセンのフリードリッヒ大王もまた「単なる人格」(ベルツ)ではなく「ある観念の人格化されたものを表す」存在になっていたのである。そしてヴィルヘルム一世は大王の再来的な存在となっていた。

1890 年代はホーエンツォレルンもの、すなわちプロイセン王家ものが多く出版された時代である。その一冊に「フリードリッヒ大王と七年戦争 (Friedrich der Große und Der Siebenjährige Krieg)」という小型本がある。青少年向けの愛国心を喚起するための文庫本シリーズの一冊である。大王が戦いに疲れ兵士の膝を枕に寝入ってしまったことなど世上よく知られた出来事がちりばめられた本である。しかしそれ以上に全体に漂う宗教的な雰囲気印象的である。たとえば 1757 年 12 月のロイテン (Leuthen) の戦いでは凄惨な戦場において夜営をしなければならなかったことがある。するとひとりの兵士が〈さあみんなで神に感謝しよう〉と歌いだし、全軍の合唱となった。この情景については「陣営の宗教的な気分はわかりやすいものだった」<sup>111</sup> と説明される。このような気分と油絵「王様はどこにでも」はどこかでつながるものがある。歴史家ニッパードの著書はこの意味で示唆に富む。ニッパードによれば 19 世紀のドイツにおいては宗教画が衰退した。それは人々におけるキリスト教の〈衰退〉を意味する。そのかわりに、歴史画と風景画に人気があったという。人々は自然というものに目を向けるようになり、そこに「神を感じ、そして自然に神性なもの (das Göttliche) と超越的なもの (das Transzendente) を感じた。むしろ自然を神のように (Natur als göttlich) 感じた。自分自身が自然のなかにおかれてあり、自分は自然とともにあると感じた。それゆえに自然は崇拝の対象だった。」<sup>112</sup> マンは「ヨーロッパでは、ドイツの本性に対して非キリスト教的、異教的であるという非難を浴びせるのが通例になっています」<sup>113</sup> としている。ニッパードのいう「自然」の

109 飯塚、前掲書、p.107

110 „Chronik der Deutschen“ Chronik Verlag, 1983, S.415 (絵はベルリンのドイツ歴史博物館に展示)

111 Ferdinand Schrader „Friedrich der Große und Der Siebenjährige Krieg“ Verlag von Carl Flemmings, S. 36 (山形大学図書館の青島函獲図書の一冊)

112 Thomas Nipperdey „Deutsche Geschichte, 1800-1866“ C.H.Beck, 1983, S.563

113 マン、上掲書、p.16

「崇拜」は「異教的」そのものと言ってよいのである。「非難」は的外れなものではないことになる。フリードリッヒ大王の銅像やヴィルヘルム一世の銅像も「王様はどこにでも」と同じような気分をもたらすものではなかったか。いつでも仰ぐことができる銅像は王の遍在を感じさせ、その人物は「聖なるものと深い結び付き」(マン)を持つことを感じさせるものであったのである。大久保利通は意識しなかったかもしれないが、君主の視覚化というものについて、いうならば前近代的という視点からは、ドイツも日本も共通の要素を有していたことになる。フリードリッヒ大王の前でジャガイモを収穫して差し出す農民は、天皇の前で稲を刈って米を収穫し、網で魚を捕獲して献ずる漁民に等しい。

6

大正天皇の没後天皇を偲ぶ何冊かの本が出版された。「嗚呼 大正天皇」(昭和元年 12 月 28 日発行; 小石川区茗荷谷町 四海出版社)の「豪雨の中に御英姿を仰ぐ、尾三大演習当時」という回想は明治天皇を彷彿とさせるものがある。また「大正天皇御治世史」(昭和 2 年 4 月 10 日発行; 麹町区飯田町 教文社)では子爵蒔田廣城の「山中に踏迷はせられた陛下」という回想が興味深い。「富士の裾野の愛鷹山御猟場へ成らせられたのは、明治三十四年霜寒い極寒二月の事であつたが、一挺の銃を肩に、山野を馳せめぐらされつゝ、獲物のあとを追ひ給ひし陛下は、いつしか侍臣等とはぐれて唯御一人、金岡村岡の宮高地の山中に立たせられた。折もよし同村の青年平野国太郎が通りかか、つたので、陛下は気軽に道筋をお尋ねになつた。平野は素よりやんごとなき御方などと夢にも知らう筈なく、これを路傍の人に教へる其のまゝの朴訥な語調で、丁寧に御教へ申上げたので、陛下は御一人で叢る雑草の道を分けさせ、金岡村? 熊堂高地に設けられた御休憩所の後方に當る開墾地に出でさせ給ひて、その一軒家桑山俵四郎方に御立寄りになり、又御気軽に道を問はせられた。居合はせた當時七十余歳、舊幕臣の俵四郎老人はいづれは東京邊から来られた華族の若殿原位に思つたのであらう、手を取るやうにくはしく御教へ申上げて、『もう正午が過ぎたから、定めしお腹も空いたんべえ、有合はせで宜かつたらお茶漬でも食べて行かつせえ。』と云ひ添へた。すると、陛下にはにつこりと御笑ひになり、『有難う』と仰せられて、其の儘教へられた道を彼方へ御立去りになつた。それから一兩日して国太郎青年と、俵四郎老人の二人に、思ひがけなく、陛下から御褒美の御沙汰があつた。二人は何事とも知らなかつたが、侍臣から當時の顛末を申し聞かされて、『扱てはあの御方が』……と余の勿體なさに身もふるへるばかり、容易に立ち上る事も出来なかつたと云ふことである。」<sup>114</sup> 二十代前半の皇太子が一時的にせよ行方不明になるとは今では想像もできない。まるでグリムのメルヘン「六羽の白鳥 (Die sechs Schwäne)」(KHM49)や「兄と妹 (Brüderchen und Schwesterchen)」(KHM11)あるいは昔話の世界の出来事であるかのような趣がある。困った

114 「大正天皇御治世史」教文社、昭和 2 年 4 月 10 日発行、p.616 以下

旅人を泊めてもてなしたら、黄金が残されていたといった昔話は珍しくない。皇太子が道に迷い、それと知らないでもてなしてくれた民間人に褒美をもたらす。これは地方に流れてきた貴種をもてなし、貴種は人びとに福をもたらすという信仰そのままである。皇太子をもてなしたひとりの名前が「倭（ひょう）」四郎だったというのも何か暗示的なものに思われるてくる。もてなしたふたりには皇太子が客人神に見えたかもしれない。宮田登は天皇をテンノウとしてとらえると、「天王の厄除けの靈験と習合する部分と、客人神としての天皇の稲霊祭祀と結合する部分とが、錯綜した形で展開することはある程度推察され得るだろう。」<sup>115</sup>と考えている。確かに「近代の天皇のイメージが宮田が目指すテンノウ（御霊）と重なっているかどうかは、なお、検討すべき課題である。これを解明するためには、近代の国家権力が押しつけようとした天皇＝現人神のイメージやパフォーマンスと、民衆のテンノウ信仰の差異に目を向けてみる必要がある。」<sup>116</sup> 前近代的な観点から考察すると、「差異」の存在は否定しがたい。蒔田が大正天皇についてわざわざグリムのメルヘンを思わせるような逸話を発表した心理は興味深いものがある。蒔田はよほど時代が進んでも天皇について、民衆に対して天から豊穡をもたらす祭祀的な存在、天子として認識していたことを表すように思われる。

明治天皇にゆかりがあった一族の子孫富沢繁（大正 11 年生まれ）の伝える話は面白い。宮崎五郎著の「手：その奇蹟 病気は必ず直る」（1960）という本で述べられていることだという。アイヌ民族研究家ジョン・パチラーの言葉の引用である。パチラーが明治 44 年春に皇居の観桜会に招待された時、握手することができた。すると天皇の手から『熱き火のごとき御力が出まして、私の全身足の裏の奥まで回って、火のごとく焼けるような感じが致しました。』しかも博士はその後、医師にも見離された重病の患者に手を当てただけで、たちまち患者が完癒するという経験をしたのです。<sup>117</sup> 著者の父親富沢春政の本籍地は南多摩郡多摩村連光寺（現多摩市）であり、若き明治天皇が狩に出かけた時に休んだ富沢家の分家であるという。明治天皇が狩猟好きなことは「明治天皇紀」から知られることである。明治 14 年 2 月 21 日には侍従長山口正定に諫止されるほどの熱中ぶりであった。（「明治天皇紀」第五，p.282 参照）そうした狩の場所のひとつが連光寺村付近の山である。山は現在の聖蹟桜ヶ丘駅に近く、都立桜ヶ丘公園となっていて、山上には聖蹟記念館がある。この山での兎狩等については「明治天皇紀」あるいは「ふるさと多摩」No.5（多摩市史年報 平成 4 年）の「多摩聖蹟記念館への道」に詳しい。明治 14 年 2 月兎狩の当日の午前 2 時に突然小休所に指定された家が、連光寺村の名家富沢政恕の家であった。富沢繁は昭和天皇にも「シャーマンの能力」<sup>118</sup>があるのではないかと考えていた。そしてあるときそれを直接に体験したというのである。那須の御用邸で植物採集をする天皇の模様がテレビ放映された。それを見ていた富沢が何気なく手をテレビのほうにかざしたところ、

115 宮田登「王権と日和見」p.20

116 小松和彦「悪霊論」（ちくま学芸文庫）1997，p.141

117 富沢繁「天皇の話よもやま話」光人社，1989，p.61

118 富沢，前掲書，p.63

「途端に、なんとも強烈な反応が、わたしの身体に伝わってきたのです。」という。前近代的として笑い飛ばすことは簡単ではある。しかしバチラーの話とあわせ、民間における天皇のひとつのとらえ方として解釈することは可能である。

「天皇が存在するという意識は、幕末まで希薄だった」（山本幸司）ので「近代天皇制にとって、それまで民衆に認知されていなかった天皇」を「認知」させることを明治政府は意図した。しかし「天皇」はともかく「天子」（赤坂憲雄）としての天皇の「認知」はどうだったであろうか。天皇を意識あるいは認知してはいなくとも、〈天子〉の存在はずっと以前から少なくとも庄内地方においては民衆に認知されていたように思われるのである。山形県東田川郡庄内町（旧余目町）赤渕新田の皇大神社には幾枚もの絵馬が奉納されてある。境内の稲荷社には「二十四孝図」のひとつ「孟宗と郭巨」の絵馬がある。1 枚 2 場面の絵馬である。「孟宗は幼くして父を失い、母に専心孝養をつくした。老母は病気がちで、いつも珍しい食物を欲しがったが、冬の最中に竹の子（孟宗）が食べたいと言った。孟宗は竹やぶでひたすら天に祈ったところ、にわかに竹の子が生え出して大喜びで掘取って帰り、吸物にして母に与えた。お陰で母の病氣も治りますます長生きしたという。郭巨は母と妻と三才の子供と四人ぐらし、あまりの貧しさに郭巨の母は孫に自分の食事を減らして食べさせていた。郭巨はこれを見て『母親は二度と得られるものでない』と涙ながらに一子を埋めようと土を掘ったところ、黄金の釜が出てその上に『天、孝子郭巨に賜う』と刻んであったという。」<sup>119</sup> 同じ旧余目町堤新田の皇大神社にも「二十四孝図」の「大舜」の絵馬がある。明治 7 年奉納のこの絵馬の内容は早くに母をなくし、継母に憎まれた舜がそれでも両親に孝養を尽くし、兄弟の面倒もみていた。「ある時、舜が畑仕事をしていると、巨象が現われ畑を耕し、鳥たちも草を取って手助けをした。天がこの孝心に感じてのことである。」<sup>120</sup> 舜はのち帝位につく。中国の説話「二十四孝」に題材をとった絵馬は願望をこめて江戸時代に流行したものらしい。旧余目町内の神社には他にも「郭巨」を題材にした絵馬があるし、「二十四孝図」を題材にしたものは少なくない。「余目町史」の詳細な調査によれば、町内の神社仏閣には 258 点の絵馬が掲げられている。図柄もさまざまであるが「神話をもとにした絵馬も七十八点と多い。…画題で最も多いのは『神功皇后と武内宿禰図』で九点を数える。つぎに多いのは『牛若丸・弁慶図』『宇治川の先陣争い』『源頼政鶴退治』『天岩戸図』『二十四孝図』などとなっている。」<sup>121</sup> 巡幸に際してはあらかじめ御用掛と宮内省から詳細な「沿道地方官心得書」が布達された。戊辰戦争で戦死した者や孝子、節婦などの他に年齢 80 歳以上の者の名前も調査の対象とされ、80 歳以上の者それぞれに 25 銭が下賜された。<sup>122</sup> それはまさに「孟宗と郭巨」の「天…賜う」そのままではないだろうか。赤渕新田の皇大神社には「神功皇后と武内宿

119 「大和郷土史」大和地区地域づくり推進会議、平成 2、p.283 以下（大和は山形県東田川郡の旧大和村。その後余目町を経て、現庄内町である）

120 「大和郷土史」p.284

121 「余目町史」下巻、p.929

122 「山形縣行幸記」参照

禰」絵馬もある。絵馬の画題は多様であるが、奉納した人の願いや奉納された時代の雰囲気をよく伝えるはずである。たとえば同じ旧余目町福島皇大神社の「地租改正実測図」（明治 8 年）は地租改正によって田畑の所有が政府によって確認保証されたという農民の喜びが根底にあるはずである。「大舜」や「孟宗と郭巨」絵馬は「天」に対するひとびとの素朴な祈りと期待の表出である。ドイツの絵画「王様はどこにでも」の効果はもしかしたらこのような絵馬と似たところにあったかもしれない。そして絵馬を奉納した人々の念頭に「天皇」はなくとも、人々は「天」に祈りをささげ、感謝することは知っていたのである。酒田の行在所に押し寄せた人々のこころの根底にはそれがあった。明治 14 年 7 月 18 日付けで山形県当局より郡長に対して布達がなされた。「御通輦の節毎町村、日中は国旗、夜分は提灯を掲げ祝意を表せしむること」<sup>123</sup> というのも項目のひとつである。行在所がおかれた各所で軒燈がともされたのは強制だったのである。しかし行在所に押し寄せた人々は強いられただけではなかった。

廻館（まわて；旧余目町）の皇大神社の「天の岩屋戸の変」絵馬は安政 10 年の奉納である。スサノオのミコトが原因で天照大神が天の岩戸にこもってしまい、「天地が常闇となり万妖が生じた。群神が相談して種々の物を飾り、天兒屋根命が祝詞を奏し天鈿女命が舞ったところ、大神が出てきて、世が再び明るくなったという神話『岩戸隠れ』を表す。」<sup>124</sup> すなわち「天皇」は意識していなくとも「天皇」にからんだ神話は遠いものではなかった。竹の子や黄金の釜を「天」から与えられたと感謝して考えることと、「天子さま」が晴天をもたらし、不作の心配を払ってくれたとよろこぶ気持ちに大きな差があるとは思われない。旧余目町吉岡の皇大神社の絵馬「農耕と札打ち図」（明治 31）は興味深い。「田圃の整備されていない時代の春作業の様子。代掻き、水掛け、苗取り、田植、苗運び、食事の準備姿など、そんななかにあって豊作を祈るように歩く札打ち講中の人々。微笑ましい構図である。」<sup>125</sup> 札打ちの行列は余目・八幡神社の巡幸絵馬の巡幸行列に類似したところがある。最後尾に描かれた大黒舞の太夫とおぼしい人物が引いているように見える車は〈福〉を乗せているのかもしれない。春に里に下りてきて豊作をもたらす田の神にも思われる。

庄内巡幸において酒田の行在所は誰がみても本間家がかかわるはずである。ところが行在所については決定まで二転三転した。本間家別荘や啄成小学校が候補にあがったあと、飽海郡役所内に新築することになった。その決定が明治 14 年 7 月である。新築計画には民権活動家として全国に知られることになる森藤右衛門も戸長として加わっていた。しかし三島県令の強い意向で行在所は地元の新興商人渡邊作左衛門（天保 6, 1835- 明治 16, 1883）の家に決定されたのである。当時の酒田政局はいろいろの要素が複雑に絡み合っており、別稿に譲るよりない。森

123 「山形縣行幸記」p.71

124 「大和郷土史」p.280

125 「余目町の絵馬」余目町教育委員会、昭 62, p.17



は辞職し、巡幸時に戸長は不在だったのである。「六時後酒田に著御、行在所に入りたまふ、行在所は東田川郡田谷村の富民渡邊作左衛門の家にして、其の結構實に宏壯輪奐なるに、今次更に土木を起して樓上に玉座を設け、欄外の屋上に樹石・花卉を栽植して庭と爲す」（「明治天皇紀」第五，p.508）渡邊は巨額の費用をかけて行在所をととのえたのである。今に残る写真からでもその豪壮さが知られる。本間家別荘や郡役所が行在所に選定されなかったのは狹隘というのが大きな理由であった。しかしたとえば新庄行在所は「狹隘」（「明治天皇紀」第五，p.504）だったから、あまり理由にはならない。行在所が新築されることもあったから、本間家が行在所に積極的にはかかわらなかったことについては別の理由を考える必要がある。本間家は庄内の旧勢力に含まれていたから、政府としてはあまり望ましくはなかった。ワッパ騒動の原因にも旧藩士らとともに大きくかかわっていた。渡邊はそうした間隙をついて米取引と倉庫業を主として一地主の立場からのしあがったのである。注目され始めたのは明治 10 年くらいにすぎない。行在所となった家ももともとは酒田三十六人衆のひとり廻船問屋尾関家のものを明治 12 年に購入したものである。県令三島通庸にしてみれば旧藩士と本間家などの酒田の大商人という旧勢力から離れて庄内を支配するためには、渡邊は格好の相手だったのである。渡邊は「新舶来ノ自由説」すなわち民権運動に対しても反対の立場だった。「余目町史」は「作左<sub>エ</sub>門の目ざすところは、一流の政商となることであつたらしい。この為、常に三島県令と接触を図り、又、その仲介で松方正義に接近し、有栖川家との接触を試みたと言われる。」<sup>126</sup>ときびしい。行幸が廻館村で休憩したとき、熾仁親王が田谷村の渡邊家をわざわざ訪れたのは、両村が指呼の距離とはいいながら異例というべき行動である。

渡邊作左衛門は他村から婿養子に入った。好奇心旺盛で、若くして江戸で学んだという経歴は清川村出身の志士清河八郎を思わせるところがある。（ちなみに清川村の清河八郎の生家は北白川宮能久の宿舎になった。）巡幸の後まもなく傾き、明治 16 年になくなる。まことに一代限りの栄華だったといえる。しかし「無計画な出費と事業の放漫経営が原因で、莫大な財を蕩尽して次第に没落する。」<sup>127</sup>とは少し手厳しい気がする。あるいは「（渡邊は）豪農で、三島県令らと結んで酒田町町人を押え、派手な米取引を展開した新興特権商人である。行在所指定でも酒田町人や民権派の森藤右衛門らの反対を押切り、表向きだけでも六千五百円余の私費を投じた豪華な行在所を修築した。」<sup>128</sup>という説明からもなにか勝者の歴史という印象を受ける。行在所に人が押しかけたのは、渡邊の勢いにも理由があったと思われる。旧勢力を押しつけ、行在所に指名される。豪華な行在所を準備する。万一のための非常御立退場もまた渡邊家に属していた。古い勢力を圧倒する非常な勢いに人びとはなにか理屈を超えた力を感じたのではないだろうか。人々はそれを巡幸とあわせて感じた。それは「近世天皇制国家の国づくり」と

126 「余目町史」下巻，p.113

127 「新編庄内人名辞典」庄内人名辞典刊行会，昭和 61，p.664

128 「山形県史」巻 4，p.206

いう政治的な意図などは吹き飛ばしてしまうような根源的なものだったのである。その心理は「演出」をもち「演出」とは感じないで大漁を天覧に供する心理に通ずるものがある。

7

酒田を発って新庄に戻る行幸の一行は 9 月 26 日ふたたび清川に宿泊した。途中余目村を過ぎ、廻館村で小休所（相馬敏雄の家）に入った。相馬家は酒田行在所渡邊家の「かつての主家であったとも言われている」<sup>129</sup> 近くの南野村の銀杏清水の水が御前水として使用され、櫛引村産の葡萄と酒田小松屋の特製の菓子が出された。明治天皇はそれらの大部分を食べ、さらに漬物を所望したという。そこで当主相馬俊雄は燕尾服姿で蔵の錠前を外し、粕漬けと味噌漬けを取ってきたと伝えられる。（行在所になった家は館主しか自分の家にいることを許されなかったのである。）懸案だった庄内巡幸が無事終わりそうであるという安堵の気持ちが伝わるようなエピソードである。庄内に入った時、天皇の車駕は清川から鶴岡に向う途中、藤島と鶴岡間 2 里 8 丁 50 間を文字どおり駆け抜けた。藤島の小休所（東田川郡役所）到着が 10 時 5 分であり、鶴岡行在所到着は 11 時である。休憩時間を考慮するとその速度は非常なものがある。考慮しなくとも速度は速い。それが政治的な緊張感に由来したものだったとするならば、酒田行在以降はその緊張感も弱まった。そうした気持ちは内陸に入るとなお高まった。9 月 29 日楯岡から山形に向う途中、稲刈りの模様を天覧した時の御製「豊年の稲刈る賤のうれしさも／穂にあらはる秋の小山田」（「明治天皇紀」第五，p.512）は安堵感の表れである。そして 10 月 1 日山形から高畠に向う途中、上山の御晝餐所（河合長六の家）で椿事があった。館主が松茸を献上したところ、天皇は「哄笑」（「明治天皇紀」第五，p.520）したのである。「午前十時二十分上ノ山御晝餐所に到りたまふ、館主河合長六土産の松茸を獻る、侍従長山口正定午餐を畢へて御晝餐所に参候す、天皇大盤に飯を盛りて松茸の羹を注がしめ、之れを正定に賜ふ、正定忽ち之れを喫す、更に栗・菓子を賜ふ、又悉く喫食す、天皇之れを覽て哄笑したまふ」（「明治天皇紀」第五，p.520）「明治天皇紀」における記述で天皇が「哄笑」という記述は珍しい。秋田におけるような「天機殊に麗し」（「明治天皇記」第五，p.497）という記述は珍しいことではない。しかし「哄笑」は稀である。もしかしたら一回だけかもしれない。それほど庄内巡幸は緊張をはらんだものだったのである。高畠から米沢に向う途中川井村では堤家が小休所になった。天皇の二頭立て馬車を入れるために門を脇へ移し、玄関には新米を置いて天覧に供した。「天皇はこれをご覧になったあと、わしづかみにして馬にお与えになったそうです。」<sup>130</sup> と堤家では語り継がれているという。なんともおおらかなふるまいである。堤家の行為は単なる天覧ではなく、お供えものをするという儀礼の意味、家の神棚に供物を捧げる行為のような印象である。

129 「余目町史」下巻，p.109

130 草柳大蔵：明治天皇村を行く。前掲書，p.25

行幸に同伴した人員のなかには荷物運びの人夫たちがいた。人夫たちは威勢はよかったが、刺青をして風体わるく、各所で役人の頭を悩ませたらしい。9 月 28 日新庄から楯岡（現村山市）に向う途中難所の猿羽根峠を越えなければならなかった。江戸時代の幕府巡見使も明治時代のイザベラ・バードも越えた山道である。その日は残暑はなほだしく、人夫連は丸裸の格好だった。「新庄市史」によれば「最上郡御巡幸記」には以下のようにあるという。「此の通し人夫等は、宿泊の場合は勿論、一寸休みの場合にも、忽ち賭博を始め輪贏を争ふ、或る県の警察署に於て、之を咎め、宮内官に照会したるに、其係官の言はるるには賭博は素より国法の禁ずる所なれば、之を犯す上は、其県に於て相当処分するは敢て差支なし、さりながら、御用品の運搬に差支を生じては相成らぬぞと返答せられたれば、其の県に於ても、如何ともせん方なくそのままに為し置きたりと、之が例となつて、通し人夫の所為に付きては、何れも大目に見る事となりしと云ふ、亦以当時の状況を窺ふを得べし。」<sup>131</sup> また「人夫の丸裸については、当初、県官・巡查らは天皇に対し不敬に当たるとて許さなかったが、人夫一同の強硬な反対にあい、やむなく黙認したとの伝えがあるが、これは前掲の記述からすると、いかにもありそうなことである。」<sup>132</sup> 明治 14 年の話である。「新しい国家の権威」（多木）もなにもあったものではない。「近代天皇制国家」の「確立」とは人々の胸底から呪術的な祈りを退け、たとえば人夫たちの振る舞いを厳格に統制していく過程を経てなされなければならなかった。それはまた天皇から「哄笑」を奪うものであったろう。それは「神秘的な存在」（キーン）である「天子」から「天皇」への道であり、国民国家形成への道だったのである。

明治 14 年 9 月 23 日新庄から清川に向った行幸は途中最上川に臨む崖に穿たれた座頭顔（なで）隧道を通り抜け、「少時蹕を河童淵坂上に駐めたまふ」そのとき三島通庸は侍従長山口正定を通して新道開鑿工事について説明した。「又前岸に數戸の茅舎あるを指さして、樵夫生を山中に營むの状を天聽に達す」河童淵付近の盤根新道は高橋由一の作になる一連の彩色石版画に描かれている。明治 17 年栃木県令三島通庸の求めによるものである。河童淵は最上川左岸であり、対岸の右岸には外川の集落（大外川と小外川）がかつてあった。高橋の石版画「最上郡岩根新道ノ内草薙村字河童淵ノ図」<sup>133</sup> にも白帆の舟の後方に 2、3 軒の家屋が見える。位置からして大外川の集落であると思われる。しかし今は大外川は影も見えない。小外川は高齢の男性ひとりが残るのみであるという。（朝日新聞 2007 年 5 月 13 日付け；山形県内版）昭和の不況期、この集落から多くの身売りが出た。昭和 9 年の調査によれば「古口村の、戸数二十戸の外川からは、十一人の娘たちが売られていった、という。凶作と、かさむ借金、そして娘の身売りは、深刻な社会問題であった。」<sup>134</sup> それもまた「近代天皇制国家」の歩みだったのである。

131 「新庄市史」第 4 巻（近現代 上）、新庄市（編）、1996、p.348

132 「新庄市史」前掲書、p.348

133 「近代山形県のあけぼの —— 高橋由一手彩色石版画 ——」（柏倉亮吉編）、山形県郷土文献刊行会（高陽堂書店発行）昭和 51、参照（頁記載なし）

134 赤坂憲雄「東北学 2、聞き書き・最上に生きる」作品社、1996、p.50

## **Die Kaiserliche Reise Meiji-Tennos durch die Provinz Shonai (Präfektur Yamagata) im Jahre 1881**

OKUMURA Atsushi

Von den kaiserlichen Reisen Meiji-Tennos, die er in seinem ganzen Leben 99 Male unternommen hat, war die Reise von Tokio durch Tohoku im Jahre 1881 die längste. Politisch genommen war diese Reise durch die Provinz Shonai sehr wichtig, weil die Bevölkerung dieser Provinz in den vorausgegangenen Jahrzehnten öfter rebellierende Bewegungen gezeigt hatte. Diese Bewegungen richteten sich nicht nur gegen die Tokugawa-Shogunatsregierung, sondern auch gegen die neue Regierung in Tokio. Den Bewohnern in Shonai die Autorität des Tennos zu zeigen und damit sie unter die Regierung zu stellen war für die Meiji- Regierung besonders dringend.

Während der Reise durch Shonai wurden dem Tenno Fischerei und Ernte vorgeführt. Der Tenno hat sich darüber gefreut. In der Tat war diese Fischerei keine echte Fischerei, weil man im voraus viele große Fische vorbereitet hatte. Es war eine Inszenierung. Aber der Zweck dieser Inszenierung hat darin bestanden, dass dadurch ein guter Fang für die Fischer herbeigeführt werden sollte. Und wenn sich die Bauern vor dem Tenno über die „gute“ Ernte freuten, hatten sie Grund, weiter mit guter Ernte rechnen zu können. Fischer und Bauer fanden im Tenno solche Kraft.

Die Unterkunft des Tennos in Sakata wurde nach der Abreise des Tennos ein beliebtes Ziel der Besichtigung. Hier ereignete sich etwas Seltsames. Viele Besucher rieben sich an dem Teppich und dem Pfosten des Zimmers. Nach ihrem Glauben sollten sie dadurch Gesundheit und leichte Geburt geschenkt bekommen.

Die Regierung wollte eigentlich den Tenno als Person vor der Nation sichtbar machen und damit seine politische Autorität zeigen. Aber die Bevölkerung von Shonai fand im Tenno mehr eine nicht-moderne Kraft als eine politische Autorität. Diese nicht-moderne Kraft war ihr seit langem wohl vertraut. Sie kam für sie aber weniger vom „Tenno“ als von dem ihnen viel näherstehenden „Ten (Himmel)“. Dieser „Ten“ soll den Fischern guten Fang und den Bauern gute Ernte bringen.